

土などである。

3つの柱痕跡（1005・1006・1009-OP）で炭および焼土が検出されており、火災にあった可能性が考えられる。

遺物としては1004-OPから須恵器甕片1点、瓦器片1点、1005-OPから甕片6点、土師器片2点、1006-OPから須恵器甕片3点、瓦器片8点、土師器壺片、土師器皿片1点、1007-OPから須恵器甕片1点、瓦器片1点、土師質皿片1点、1008-OPから杯片、1009-OPから土師器片、須恵器甕片、瓦器片、土師器片1点などが出土したが、いずれも細片で図示できなかった。

建物の時期は、1006-OPの出土土器などから13世紀代と考えられる。

#### 1014-OB （第23・46・47図、図版14）

1004-OBの東側で、丘陵先端部やや北側に位置する。柱間距離2.2m離れて柱筋をそろえるようにして隣接する。標高はT.P約36.2mである。

1014～1025-OPで構成されている。建物跡は2間×3間のものである。規模は4.7m×3.8mで、面積17.9㎡を測る。柱穴の距離は桁行で2.4m、梁行で1.8～2.0mである。方向はN-65°-Wを示す。

柱穴は隅丸方形で径約0.40～0.45m、深さ約0.1～0.2mである。

埋土は黄褐色土混灰色砂質土、灰色砂質土混黄褐色土などである。柱痕跡は7つ検出でき、埋土は灰色砂質土および黄褐色土混灰色砂質土である。

2つの柱痕跡（1015・1018-OP）で炭および焼土が検出されており、火災にあった可能性がある。遺物は出土しなかった。

建物の時期は、位置関係からみてほぼ1004-OBと同時期と考えられる。

#### 1028-OB （第23・46・48図、図版14）

1014-OBの南東約15m付近に位置する。標高はT.P約36.2mである。1028～1033-OPで構成されている。建物跡は2間×1間のもので規模は約4m×2mで、面積約8㎡を測る。

柱穴の距離は桁行1.6～2.2m、梁行1.7～2.0mである。方向はN-10°～15°-Eを示す。柱穴は隅丸方形で径約0.30～0.45m、深さは約0.1～0.2mである。

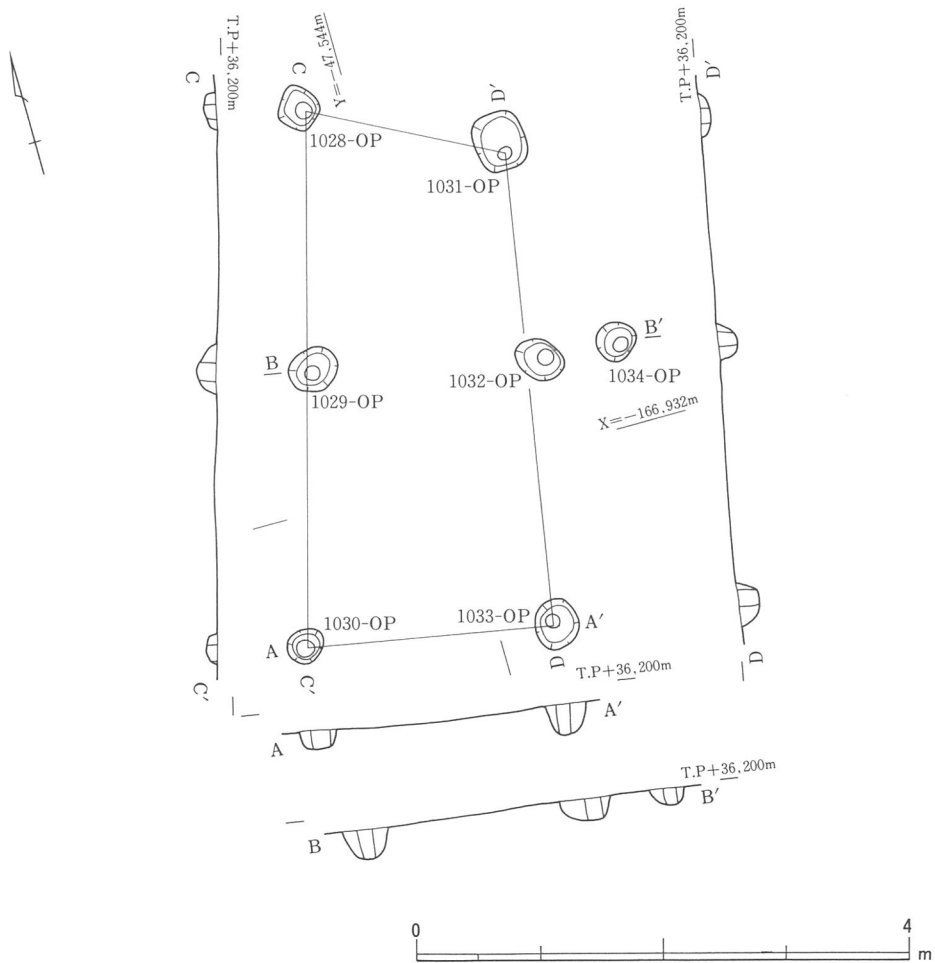
埋土は黄褐色土混灰色砂質土、淡灰色土、暗灰色などで、柱痕跡はすべてのピットから検出できた。

遺物としては1029-OPから瓦器片、1030-OPから須恵器片、1033-OPから須恵器高杯脚部などが出土したが、いずれも細片で図示できなかった。

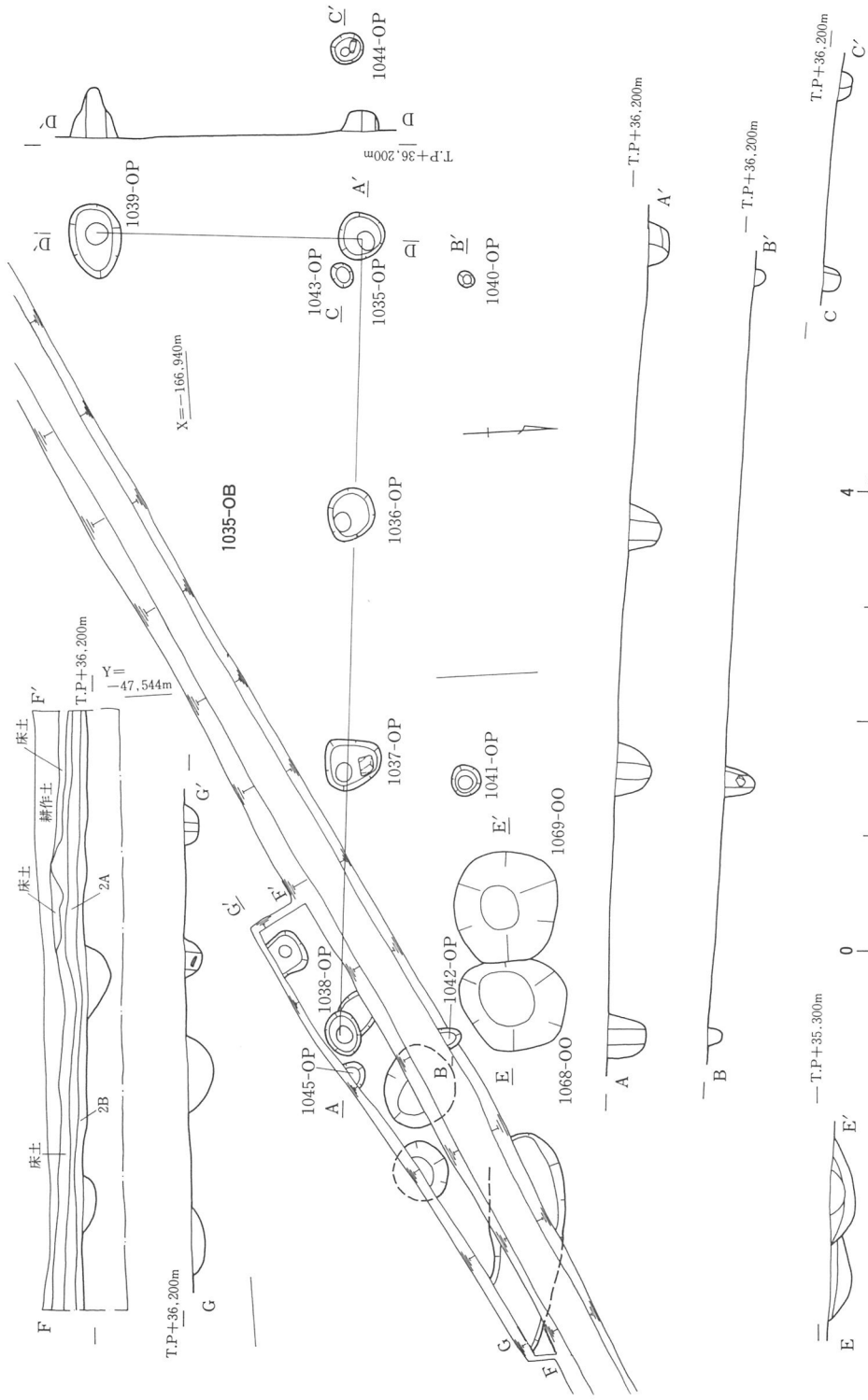
建物の時期は、1029-OPの出土土器や丘陵部の包含層の時期から見て1004・1014-OBとさほど時期差がないものと思われるが、建物の方向が相違するので同時期ではない可能性も考えられる。

1035-OB (第23・46・49図、図版15)

丘陵先端部の微高地上で、1028-OBの南約4m付近に位置する。標高はT.P約36.2mである。1035~1039-OPで構成されている。



第48図 1028-OB平面・断面図 (1/60)



第49図 1035-OB、1068・1069-OO、南側拡張部平面・断面図 (1/60)

調査区内で検出された建物跡は1間×3間のものであるが、建物跡は南東部分が調査区外に延び、それ以上の建物規模であると思われる。規模は約4m×2mで、面積約8㎡を測る。柱穴の距離は桁行で1.6～2.2m、梁行で1.7～2.0mである。方向はN-86°-Wを示す。

柱穴は隅丸方形で径0.40～0.65m、深さ約0.20～0.35mである。埋土は黄褐色土混灰色砂質土、灰色土混黄褐色土などである。柱痕跡はすべてのピットで検出できた。建物跡の北側に位置する1040～1045-OPは、位置関係から見て庇や入口の柱などの機能もあると考えられる。

遺物としては1044-OPから須恵器片2点、土師器片1点が出土している。

建物の時期は遺物からは決定することはできないが、1028-OBとの位置関係や建物の方向から見て同時期ではないかと思われる。

#### 1046-OF (第23・46・50図、図版16)

調査区東側で、1014-OBの東約10m付近に位置し、丘陵先端部の微高地上を東西に走る柵列である。標高はT.P約36.2mである。

1046～1053-OPで構成され、柱間距離2.2～2.3mの7間である。1054・1055-OPはほぼ柵列に沿って検出され、付属施設ないし補修杭等の柱痕跡と考えられる。主軸方向はN-64°-Wを示し、柱穴は隅丸方形状や円形などを呈し、径0.3～0.5mで、深さは約0.20～0.35mである。埋土は黄褐色土混灰色砂質土、灰色土混黄褐色土などである。10本の柱痕跡はすべて検出できた。

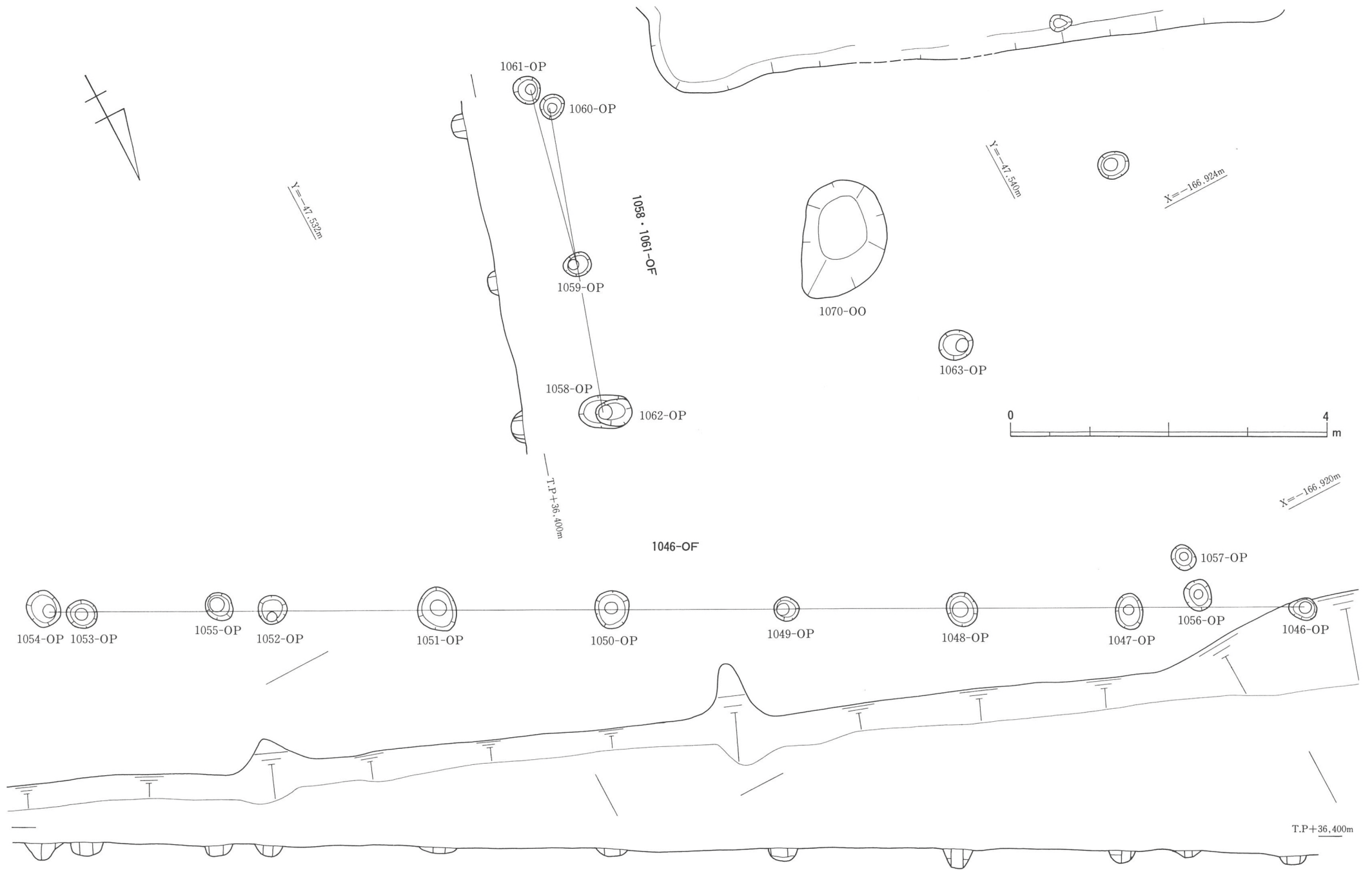
遺物としては1050-OP内から須恵器甕片2点、土師器片1点が出土しているが、細片のためいずれも図示はできなかった。

柵列の時期については、出土遺物が細片のため決定することは困難であるが、柵列の西側に位置する掘立柱建物跡との位置関係や、方向から見て1004・1014-OBと同時期ではないかと思われる。

#### 1058・1061-OF (第46・50図)

1046-OFの南側に位置し、ほぼ直交する軸にやや振れて検出された。

1058～1060-OPで構成され、柱間距離約2mの2間分を検出した。主軸方向はN-16°-Eである。柱穴は隅丸方形及び円形などで径0.3～0.4mで、深さ約0.2mである。



第50图 1046·1058·1061—O F 平面·断面图 (1/60)

また、やや軸を振れて1059・1061・1062-OPで構成される1061-OFも併せて検出された。柱間の距離は約2.2mであるが、これら柱列の性格は不明である。

1063-OPと共に建物を構成する可能性や、若干方位は振れているが1046-OFなどとの関連が注目される。主軸方向はN-14°-Eを示し、柱穴は隅丸方形や円形などで径0.3~0.4m、深さは約0.20~0.35mである。埋土は黄褐色土混灰色砂質土、灰色土混黄褐色土などである。5本の柱痕跡はすべて検出できた。

柵列の時期は出土遺物が細片のため決定できないが、掘立柱建物跡や1046-OFなどと時期差がないと思われる。

### 1065-OO (第23・46・51図)

調査区南側の1028-OBと1046-OFの間で検出された。平面形は細長い楕円形を呈し、長辺8.7m、短辺2.2~3.2mで、深さ約0.15mである。東側に行くに従い幅が広くなり、隅丸方形に近い形状をしている。

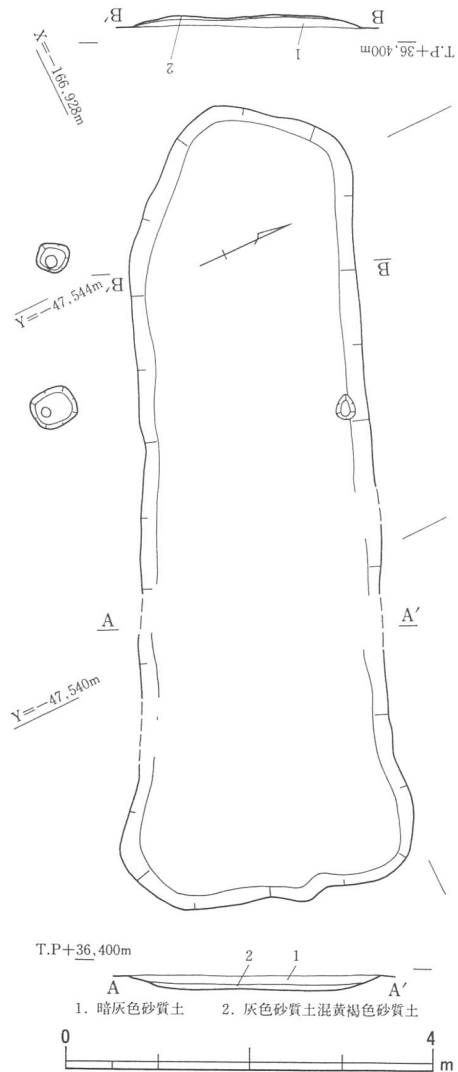
埋土は上・下2層に分層され、上層は暗灰色砂質土、下層は灰色砂質土混黄褐色砂質土である。

遺物としては上層から瓦片6点、瓦器皿1点、瓦器片2点、土師器片2点、須恵器壺口縁2点、高杯脚1点などが出土したが、細片のため図示はできなかった。

ここでは一括して遺物が出土しておらず、土坑の時期の細かい限定は困難であるが、掘立柱建物跡とさほど時期差がないと思われる。

### 1066-OO (第46・52・53図、図版37)

1028-OBのやや西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.87m、短径0.75mを測る。深さは0.24mである。埋土は上・下2



第51図 1065-OO平面・断面図 (1/80)

層に分層され、上層は黄橙色混灰色砂質土、下層は暗灰色混黄色粘質土である。

遺物は上層から瓦器片4点、須恵質東播系摺鉢片1点（第53図106・107）が出土した。

(106)は須恵器の東播系摺鉢である。底部は欠損するが復元口径22.6cm、残存器高5.1cmを測る。(107)は瓦器小皿で、復元口径9cm、器高1.6cmを測る。剝離が著しく調整は不明である。

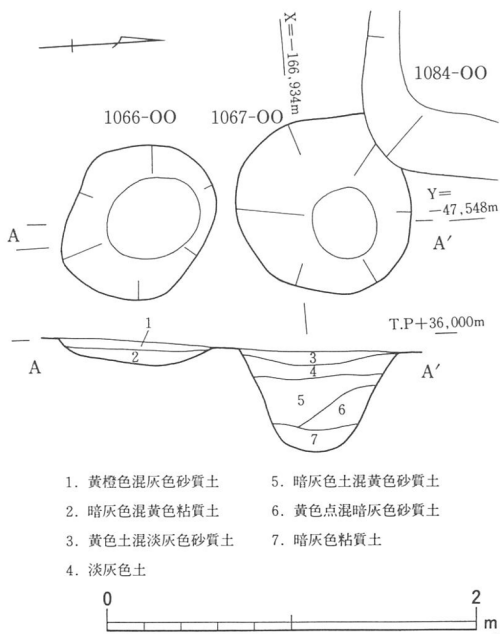
1067-〇〇（第46・52図、図版16）

1066-〇〇の北側に隣接し、平面形は円形を呈する。径約0.96mを測り、深さは0.55mである。埋土は5層に分層することができ、第1層（黄色土混淡灰色砂質土）、第2層（淡灰色土）、第3層（暗灰色土混黄色砂質土）、第4層（黄色点混暗灰色砂質土）、第5層（暗灰色粘質土）である。遺物は須恵器の甕片が1点出土した。

土坑の時期は北西側を1084-〇〇に切られていることや、ほぼ同時期と考えられる1066-〇〇との位置関係により鎌倉時代と考えられる。

1068・1069-〇〇（第46・49図、図版17）

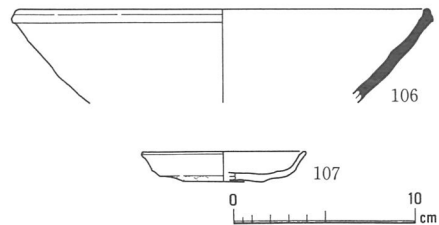
1035-〇Bの北側にほぼ隣接し、1069-〇〇が1068-〇〇を切るような形で検出された。



第52図 1066・1067-〇〇平面・断面図(1/40)

1068-〇〇の平面形は円形を呈し、径0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は上・下2層に分層され、上層は灰色砂質土混黄褐色粘質土、下層は黄褐色砂質土である。

1069-〇〇の平面形はほぼ円形を呈し、径0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は3層に分層され、第1層（黄褐色砂質土混灰色砂質土）、第2層（黄褐色粘質土混淡灰色砂質土）、第



第53図 1066-〇〇出土遺物(1/4)

3層（黄褐色粘質土）である。

遺物としては1068-〇〇から瓦器片2点、土師器片2点、須恵器甕片3点が出土した。1069-〇〇からは瓦器片1点、土師器土釜片1点、須恵器片3点が出土した。遺物は細片のため図示できなかった。

ここでは一括して遺物が出土せず、土坑の時期の細かい年代を決定することは困難であるが、1068・1069-〇〇は切り合いが見られるがほとんど時期差がなく、周辺の掘立柱建物跡ともさほど時期差がないのではないかと思われる。

#### 1070-〇〇（第46・50図）

1065-〇〇の北側で検出された。平面形は不整形な円形を呈し、長径1.5m、短径1.1mを測る。深さは0.3mで、埋土は淡灰色砂質土である。

遺物の出土がなく土坑の時期の限定は困難であるが、鎌倉時代ではないかと思われる。

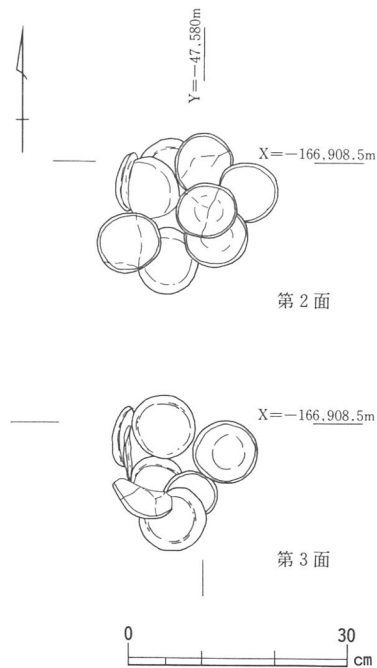
#### 1071-〇S（第23・46・54～58図、図版17・18・37～39）

調査区の西側隅に位置する。東西方向に走り、西側を調査区外に延ばす。

検出全長は16.7mで、埋土は6層に大別できる。第1層（第56図土色番号7・8）、第2層（第56図土色番号9）、第3層（第56図土色番号10）、第4層（第56図土色番号11）、第5層（第56図土色番号12～14）、第6層（第56図土色番号15）である。断面観察の結果、この溝は再掘削されており大きく第1～3層と第4～6層の2時期に分かれるものと思われる。最初の溝が掘削されたときの最大幅は2.7mで、東側に行くに従い幅が狭くなっている。当初は幅3m以上あった可能性が高い。

断面形状はV字に近いU字状を呈し、西側に行くほど深くなり、U字状を呈する。

再掘削した溝は、最大幅1.8m、深さ0.65m前後を測る。断面形状は最初に掘削されたものと同様の



第54図 1071-〇S土師器小皿  
出土状況(1/10)



U字状を呈する。遺物は各層から出土しているが、再掘削された溝の底から多量の須恵器、土師器が出土している。(第54・55図)

第1層からは須恵器杯片2点(6世紀末～7世紀初1点、6世紀後半1点)甕片5点、短頸壺片1点、高杯片1点、器台片3点、第2層からは須恵器杯片1点、甕片4点、器台片1点、甕片1点、第3層からは須恵器杯片5点(5世紀後半1点、6世紀後半3点、飛鳥～奈良時代1点)、甕片18点、短頸壺片2点、高杯片3点、器台片4点、提瓶片2点、第4層からは須恵器杯片1点、甕片1点、第5層からは須恵器の甕頸部片9点、第6層からは須恵器杯片1点、甕片7点、高杯片1点が出土した。

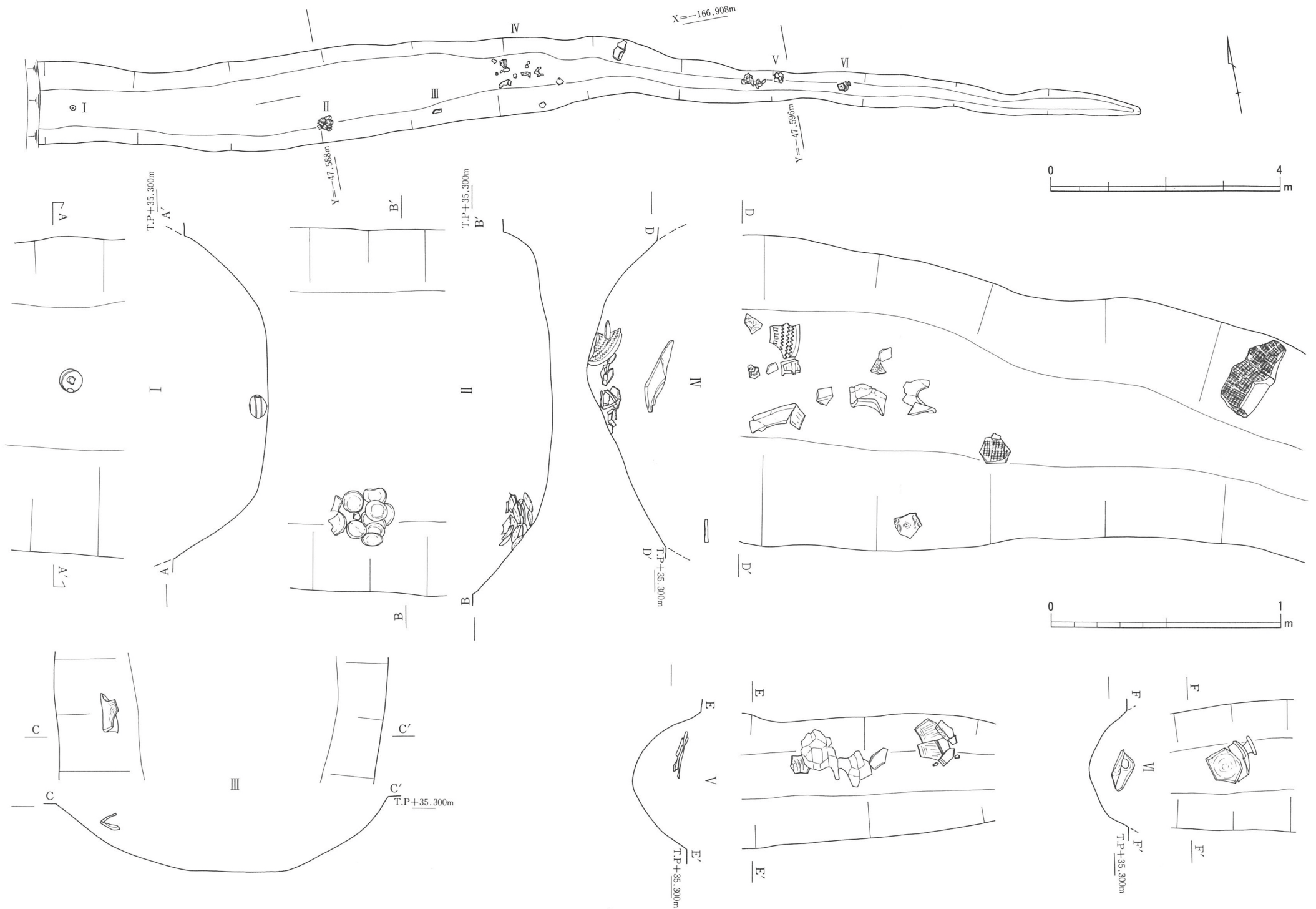
図示できた主な出土遺物としては第57・58図(108～151)がある。

(108～134)は土師器の小皿である。口径は8.5cm前後のものが多く、最大口径は(133)の10.2cm、最小口径は(127)の7.7cmである。器高は1.5cm前後のものがほとんどである。土師器小皿の口縁部外面はヨコナデ調整がみられ、底部外面には指頭痕が見られる。

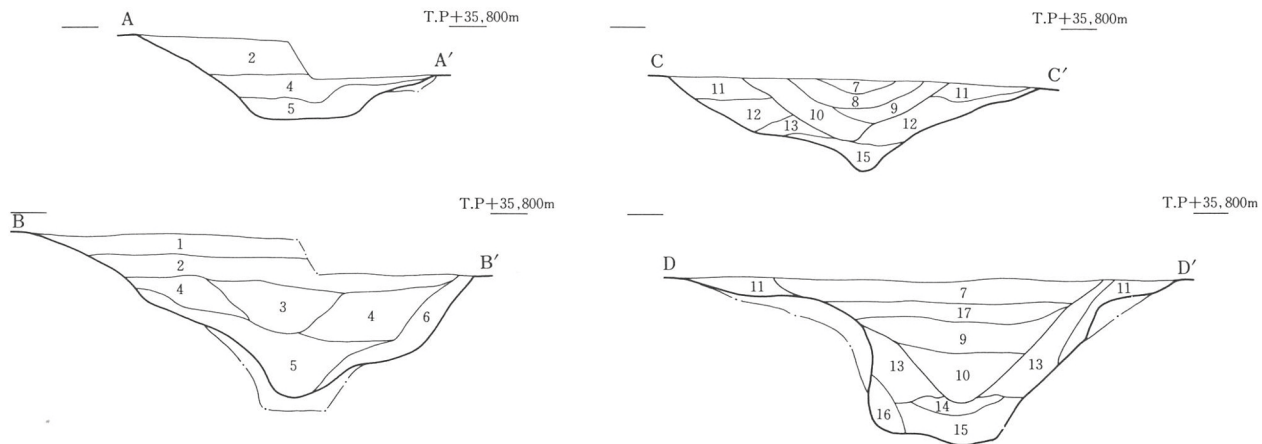
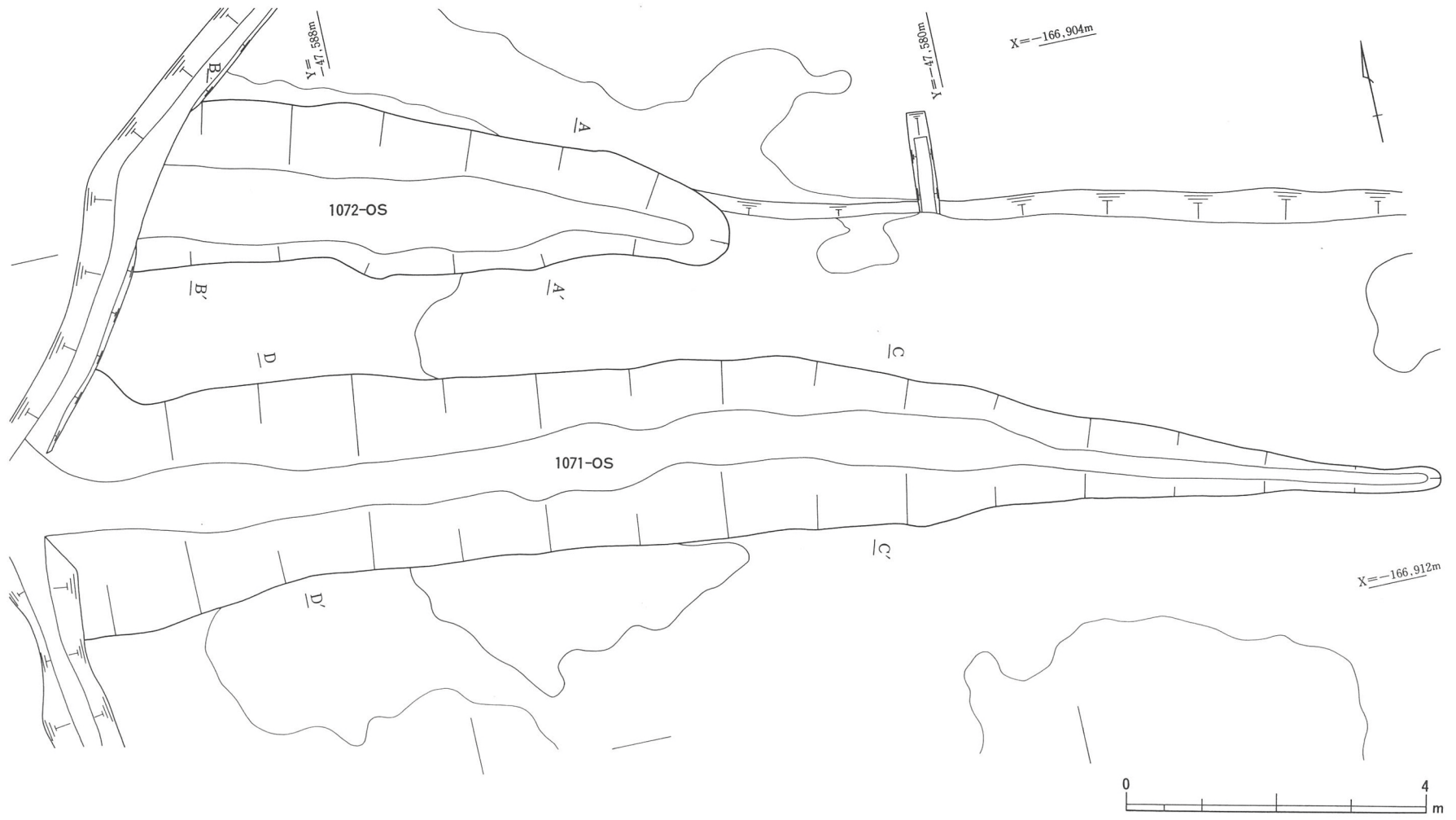
(135～137)は須恵器の杯身である。(135)は復元口径7cm、残存器高2.3cmを測る。口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸くおさめられている。(136)は口径11.4cm、器高3cmを測る。剝離が著しく調整は不明である。(137)は復元底径12.2cm、残存器高2cmを測る。(138)は須恵器の高杯である。残存器高11cmを測り、杯部外面には刺突文がめぐり、脚部には3方向に長方形のスカシを付ける。(139・140)は須恵器の器台である。(139)は残存器高9.5cmを測る。外面には自然釉が見られ、台形状のスカシを3方向に付ける。

(140)は残存器高4.4cmを測る。(141)は須恵器の甕である。体部の中位に最大径を有する球体で残存器高6.2cm、最大胴部径8.4cmを測る。体部中央よりやや上に円孔(径1.4cm)が上外方から下内方に穿孔する。また、体部中央より底部にかけての外面には、静止ヘラケズリ調整が見られる。(142・143)は須恵器の提瓶である。(142)は口径7.5cm、器高18.9cmを測る。体部外面にはカキ目調整と刺突文が見られ、肩部には輪状で左右一對の把手を付ける。口縁部には「+」のヘラ記号が付けられている。(143)は蓋付きの提瓶で口径6.6cm、残存器高7.7cmを測る。口縁部はやや内傾し、外面には波状文が見られる。口縁部内面及び外面には自然釉がかかり、肩部には輪状で左右一對の把手を横方向に付ける。

(145～149)は須恵器の甕である。(145)は復元口径30cm、残存器高7cmを測る。口縁端部は丸く、外面にはタタキが見られ、内面には同心円タタキ調整が見られる。(146)は復元口径24.7cm、残存器高8.1cmを測る。外面には自然釉がかかり、内面は同心円タタキの後にナデ消している。(147)は復元口径25.2cm、残存器高7.4cmを測る。外面は平行タタキ



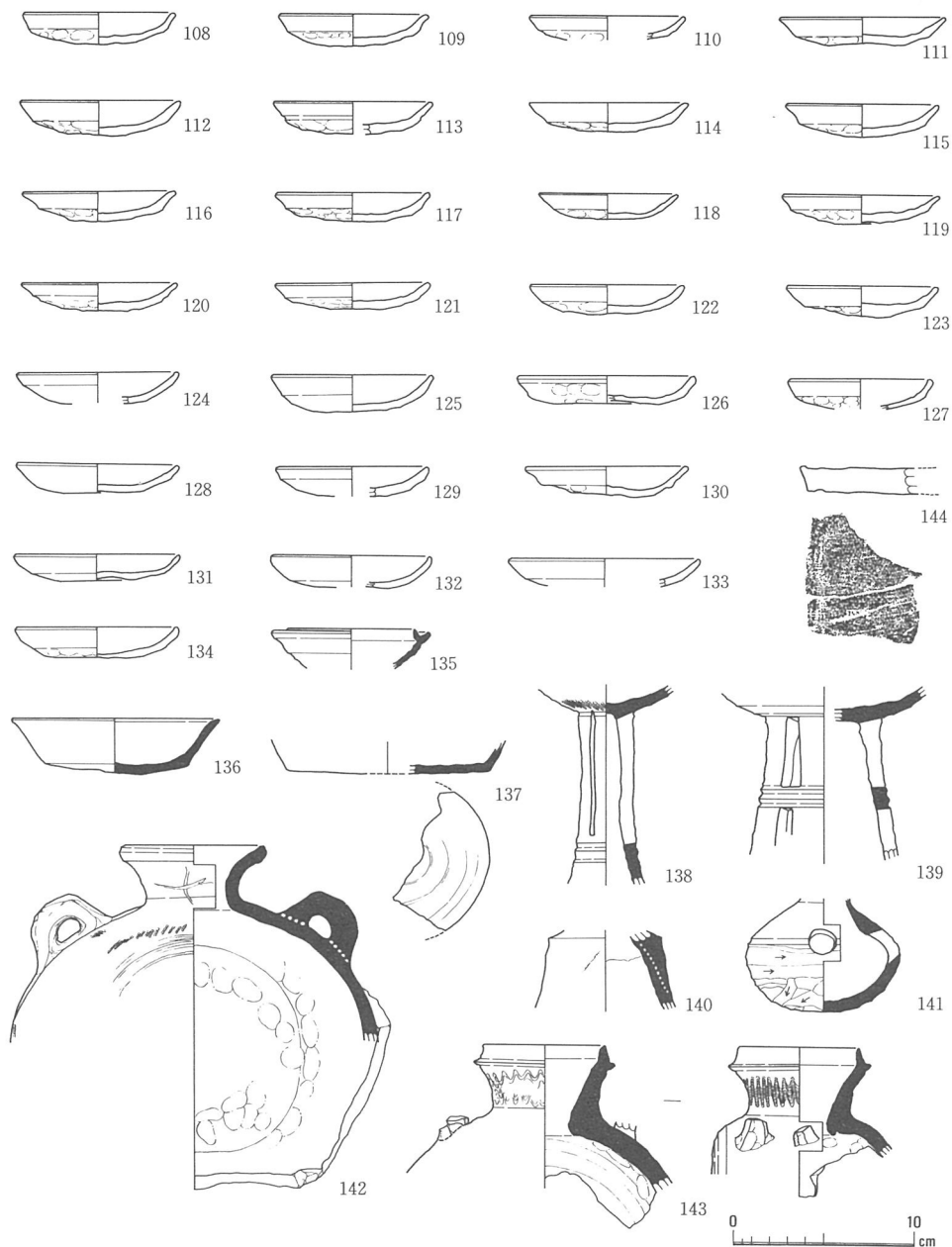
第55图 1071-O S上層平面・立面图 (上1/80・下1/20)



- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 1. 礫混褐灰色土       | 9. 茶灰色土       |
| 2. 淡褐灰色土        | 10. 暗茶褐色土     |
| 3. 暗茶褐色礫混土      | 11. 褐灰色細礫土    |
| 4. 橙色混茶灰色礫混土    | 12. 暗褐色礫混土    |
| 5. 灰色砂礫混暗灰色粘質土  | 13. 灰色混茶褐色土   |
| 6. 灰色砂質土混明橙色礫混土 | 14. 灰色砂質土     |
| 7. 礫混褐灰色土       | 15. 灰色砂礫      |
| 8. 黑褐色土         | 16. 茶褐色砂質土    |
|                 | 17. 茶灰混礫混褐灰色土 |

第56圖 1071・1072-O S平面・断面圖 (1/80・1/40)

の後にカキ目調整を行い、内面は同心円タタキ調整が行われている。(148)は口径26.6cm、残存器高9.7cmを測る。外面は平行タタキの後にカキ目調整、内面は同心円タタキ調整が行われている。(149)は口径30cm、残存器高7.1cmを測る。外面は平行タタキの後にカキ

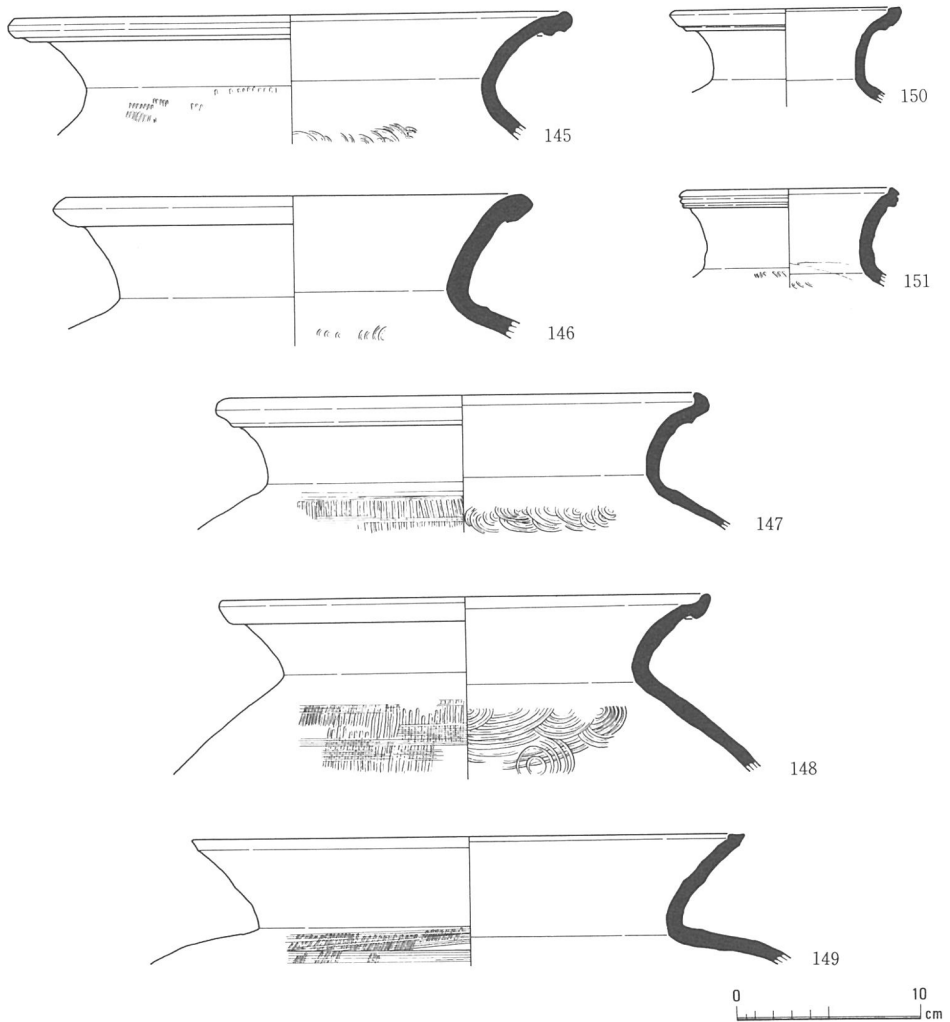


第57図 1071-O S出土遺物 1 (1/4)

目調整が行われ、外面及び口縁部内面には自然釉が見られる。(150・151)は須恵器の壺である。(150)は口径12.2cm、残存器高5.2cmを測る。口縁部内面及び外面に灰かぶりが見られる。(151)は復元口径11.1cm、残存器高5.4cmを測る。(144)は瓦で布目痕がある。

掘削時期及び埋没時期は、溝から出た遺物の90%以上が古墳時代の須恵器であり、南側肩部から土師器皿が14点以上出土していることより、掘削時期は鎌倉時代であると思われる。また、上層からは飛鳥～奈良時代の杯も出土しており、その時代の遺構も周辺に存在することが判明した。

埋没時期は中世後期の遺物は出土していないが、鎌倉～室町時代までの幅を持って考え



第58図 1071-O S 出土遺物 2 (1/4)

る必要があるだろう。

1072-O S (第23・46・56・59図、図版40)

調査区の西側隅に位置し、1071-O Sの北側1.5m付近に平行して走る。

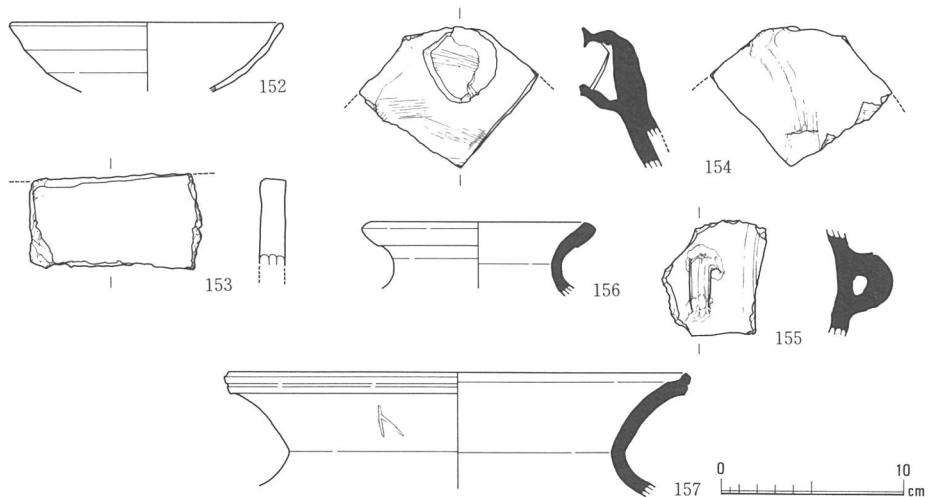
東側に行くに従い幅が狭くなり、西側を調査区外に延ばす。断面形状はV字状を呈するが、東側ではU字状を呈する部分もある。検出全長約8mで、最大幅2.4m、深さ0.85mである。

埋土は4層に大別でき、第1層(礫混褐灰色土)、第2層(淡褐灰色土)、3層(暗茶褐色礫混土・橙色混茶灰色礫混土)、4層(灰色砂礫混暗灰色粘質土・灰色砂質土混明橙色礫混土)である。

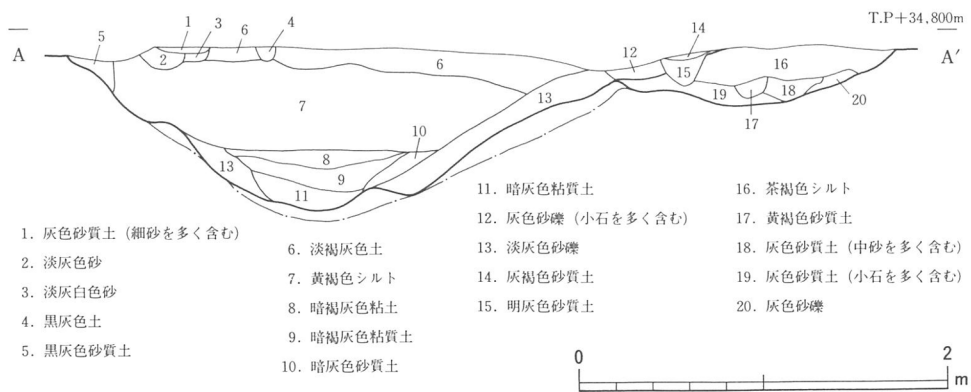
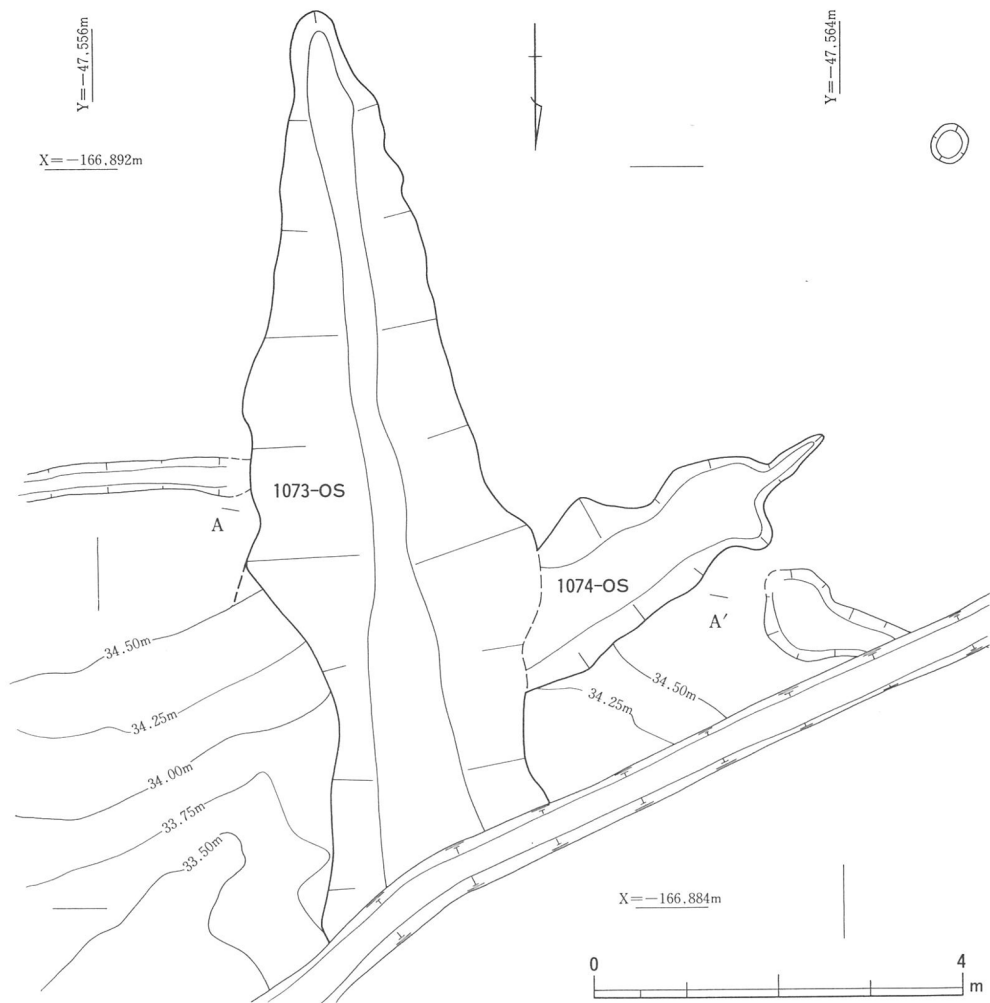
遺物は各層から見られ、第1層からは瓦器碗1点、土師器土釜片1点、須恵器杯片7点(6世紀前半～中葉4点、6世紀後半3点)、甕片18点、瓶1点、高杯(長脚)1点、溶着須恵器片2点、第2層からは須恵器杯片4点(6世紀中葉)、甕片7点、高杯片1点、器台片1点、第3層からは瓦器皿の小片と、須恵器杯片6点(6世紀中葉)、甕片15点、壺片4点、器台片1点、第4層からは須恵器杯片2点(6世紀中～後葉)、甕片3点などが出土した。

出土した遺物の中で図示できた主なものは第59図(152～157)である。

(152)は瓦器碗で復元口径14.8cm、残存器高3.8cmを測る。内・外面の調整は摩滅が著し



第59図 1072-O S出土遺物(1/4)



- 1. 灰色砂質土 (細砂を多く含む)
- 2. 淡灰色砂
- 3. 淡灰白色砂
- 4. 黒灰色土
- 5. 黒灰色砂質土

- 6. 淡褐色灰色土
- 7. 黄褐色シルト
- 8. 暗褐色灰色粘土
- 9. 暗褐色灰色粘質土
- 10. 暗灰色砂質土

- 11. 暗灰色粘質土
- 12. 灰色砂礫 (小石を多く含む)
- 13. 淡灰色砂礫
- 14. 灰褐色砂質土
- 15. 明灰色砂質土

- 16. 茶褐色シルト
- 17. 黄褐色砂質土
- 18. 灰色砂質土 (中砂を多く含む)
- 19. 灰色砂質土 (小石を多く含む)
- 20. 灰色砂礫

第60図 1073・1074-O S平面・断面図 (1/80・1/40)

いため不明である。(153)は瓦片である。(154)は装飾付器台(子持器台)の破片と思われる。(155)は須恵器提瓶の把手である。(156)は須恵器の壺で、復元口径12.7cm、残存器高4cmを測る。(157)は須恵器の甕で、復元口径25.4cm、残存器高6.7cmを測る。口縁部外面に「人」のヘラ記号が付けられている。

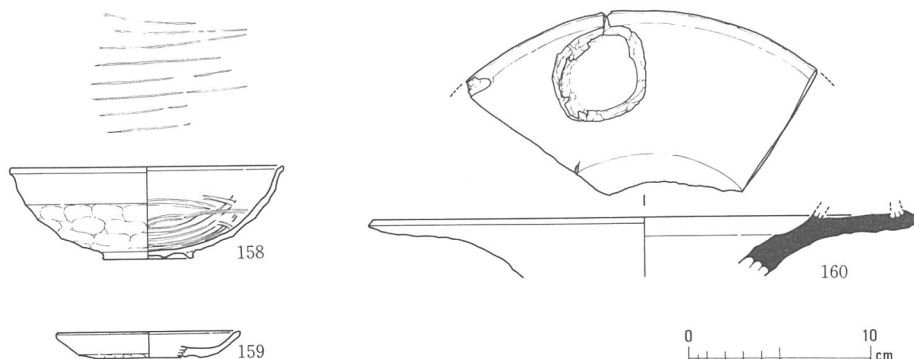
掘削時期及び埋没時期は、溝から出た遺物の90%以上が古墳時代の須恵器であり、第3層から瓦器皿が出土しているが、最下層からは須恵器のみの出土であることより、遺物から掘削時期を考えると古墳時代と思われるが、1071-O Sとの位置関係や遺物の出土状況から見ると鎌倉時代であると思われる。

埋没時期については中世後期の遺物は出土していないが、鎌倉～室町時代までの幅を持って考える必要があるだろう。

#### 1073-O S (第23・46・60・61図、図版19・40)

調査区北側の丘陵北斜面に沿って走り、1071-O Sに約75°振れて位置する。北側を調査区外に延ばし、南側は幅が狭くなるような形状で検出され、断面形状はなだらかなV字状を呈する。標高はT.P約34.00～34.65mである。検出全長は約10mで、最大幅3.2m、深さ0.95mである。埋土は上・下2層に大別できる。上層(第60図土色番号6・7)、下層(第60図土色番号8～13)である。

遺物は各層から見られ、上層からは瓦器碗片1点、皿片2点、土師器片1点、須恵器杯片3点(5世紀後半～6世紀)、甕片3点(内面に同心円タタキが顕著に残るもの)、高杯片1点、短頸壺片1点、下層からは須恵器杯片3点、壺類片2点、甕片1などが出土した。



第61図 1073-O S上層出土遺物(1/4)



出土した遺物の中で図示できたものは第61図（158～160）がある。

（158）は瓦器碗で復元口径15cm、器高5cm、底径4.8cmを測る。外面には指頭痕が見られ、底部内面にはミガキと並行線状の暗文が見られる。（159）は瓦器の小皿で復元口径10cm、器高1.4cmを測る。内・外面ともナデ調整が施され、底部外面には指頭痕が認められた。

（160）は子持器台の破片と思われる。

掘削時期及び埋没時期は、上層から瓦器皿が出土しているが、出土した遺物の大半が古墳時代の須恵器であるため、遺物から見ると掘削時期は古墳時代と考えることも可能だが、遺物の出土状況や規模から見て鎌倉時代であると思われる。埋没時期は鎌倉～室町時代までの幅を持って考える必要があるだろう。

#### 1074-O S （第23・46・60図、図版19）

調査区西側の丘陵北側斜面を走り、1073-O Sに東側を切られ、主軸方向は約65°振れて位置する。西側（山側）に行くに従い幅が狭くなり、断面形状はなだらかなU字状を呈する。標高はT.P約34.2～34.7mである。検出全長約4mで、最大幅1.5m、深さ0.35mである。

埋土は2層に大別でき、上層は茶褐色シルト、下層は黄褐色砂質土、灰色砂質土、灰色砂礫である。

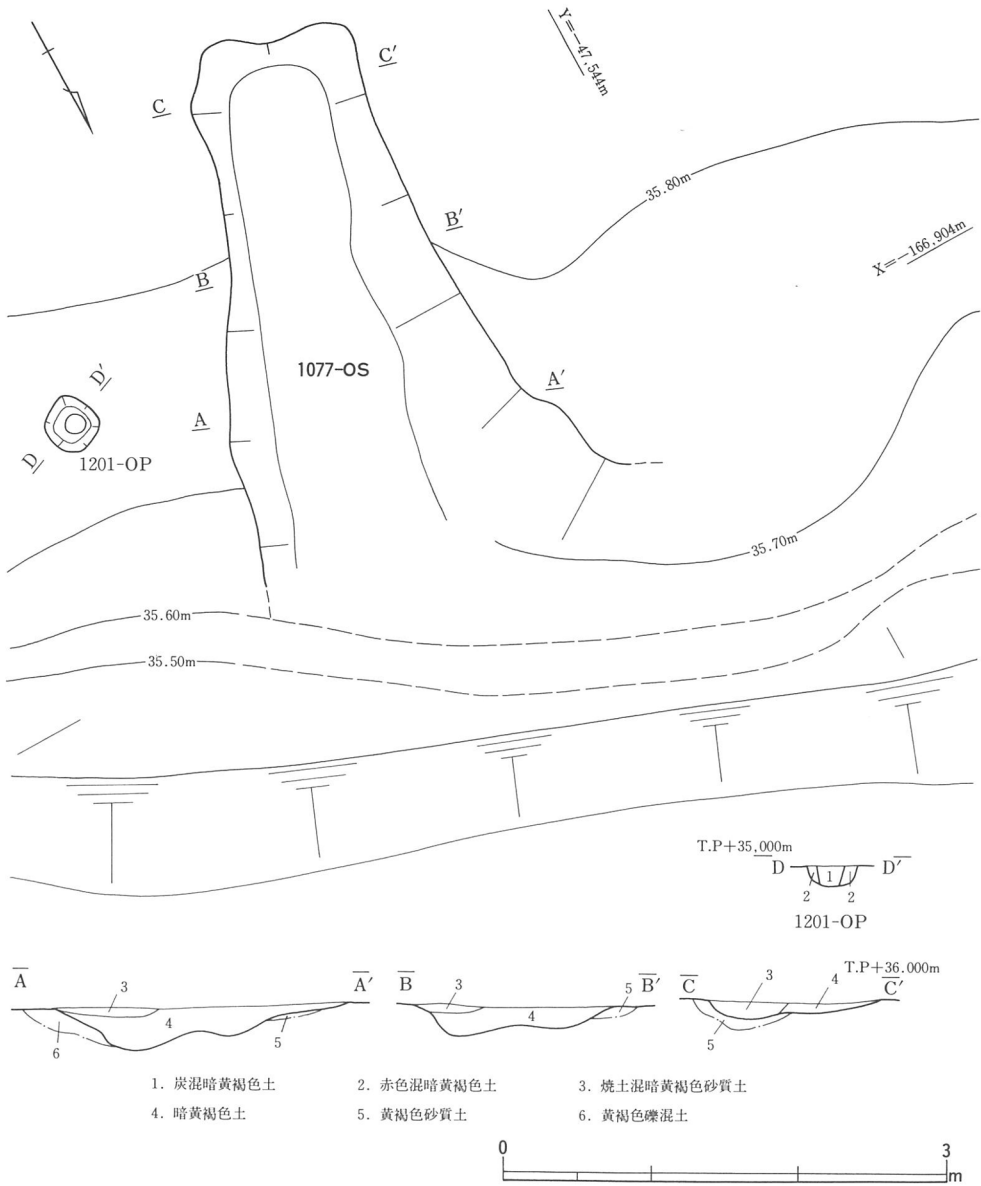
掘削時期及び埋没時期については、遺物が出土しなかったため明確な時期をつかめなかったが、位置関係から見て1073-O Sとあまり時期差がないものと思われ、鎌倉～室町時代と思われる。

#### 1077-O S （第23・46・62・63図、図版19・41）

調査区のはぼ中央部で西側の丘陵北側斜面を走り、南側に行くほど幅が狭くなり、断面形状はなだらかなW字状を呈する。標高はT.P約35.65mで、主軸方向はN-16°-Eである。検出全長約3.5mで、最大幅2.4m、深さ0.3mである。

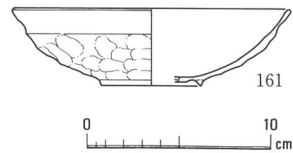
埋土は大きく2層に大別でき、上層は暗黄褐色砂質土（炭を多く含む）、下層は暗黄褐色土である。

遺物は、上層から青磁片1点、土師器片1点、瓦質土釜片1点、下層からは、瓦器片4点、土師器片1点、須恵器杯片（6世紀）、甕片6点、サヌカイト片などが出土した。出土遺物で図示できたものには第63図（161）がある。



第62図 1077-OS、1021-OP平面・断面図 (1/50)

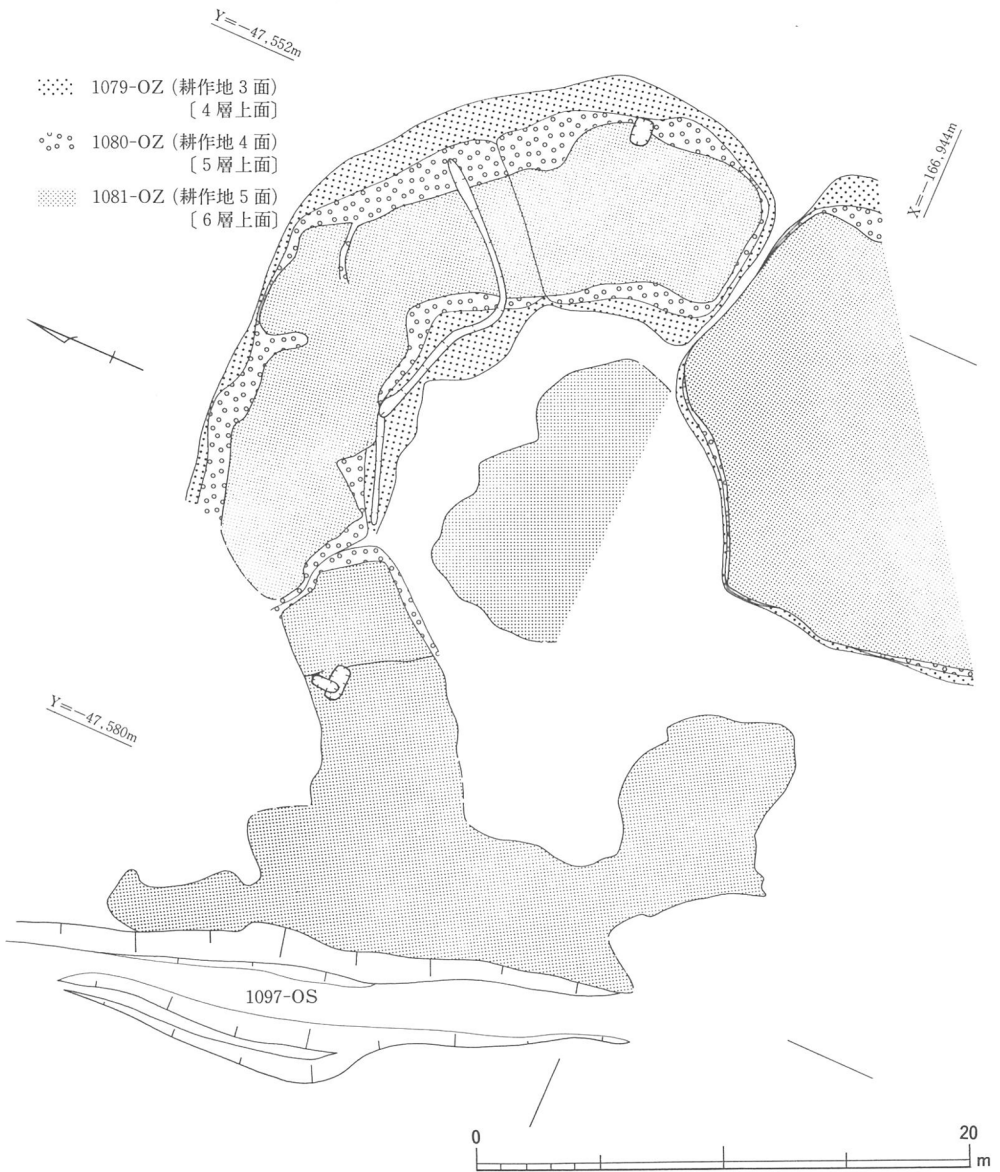
(161)は瓦器碗で口径15cm、器高4.2cmを測る。外面には指頭痕が見られるが、他は摩滅のため調整は不明である。掘削時期及び埋没時期は、上層が薄く下層に鎌倉時代以前の遺物が含まれていないことより、鎌倉～室町時代と思われる。



第63図 1077-OS出土遺物 (1/4)

### III. 室町時代

室町時代の遺構は、調査区南側の丘陵低地部で検出され、旧耕作地及び土坑などがある。いずれの遺構も近～現代の削平によって削られているため残存状態はあまり良好ではなかった。



第64図 1097-O S、1079~1081-O Z 平面略図 (約1/300)

1078-O Z (第66・68図、図版20)

第3層上面の標高T.P約36.1m付近に位置する。幅0.5~1.0mの畦畔を持ち、1区画は確認できる範囲で54m<sup>2</sup>~132m<sup>2</sup>である。耕作地第2面上になる。

1079-O Z (第64・66図、図版20)

第4層上面の標高T.P約36.0m付近に位置する。幅10~12m前後のものと思われるが、残りが悪く明確な区画は確認できなかった。耕作地第3面上になる。

1080-O Z (第64・66図、図版21)

第5層上面の標高約T.P35.9m付近に位置する。幅6.5~11.0m前後であると思われるが、明確な区画は確認できなかった。耕作地第4面上になる。

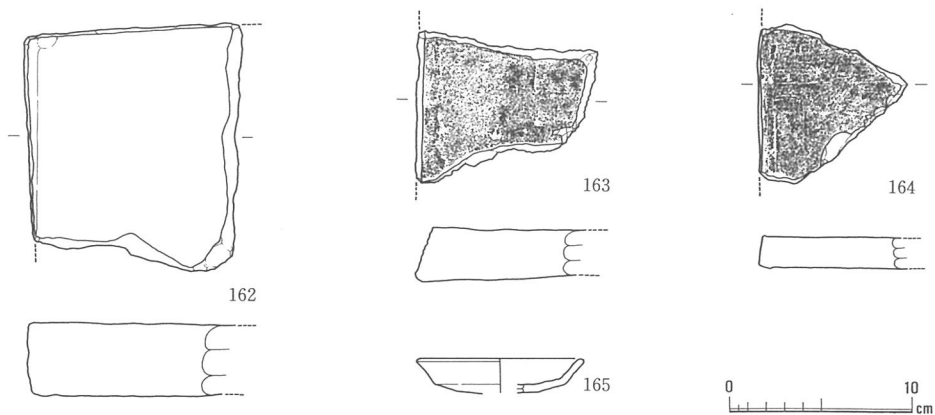
1081-O Z (第64・66図、図版21)

第6層上面の標高約T.P35.9m付近に位置する。幅6.5~11.0m前後であると思われるが、明確な区画は確認できなかった。

第6層上面をベースにする土坑が検出されたことから、谷の自然堆積の可能性も考えられる。耕作地第5面上になる。

耕作地(1078~1081-O Z)の土層堆積は灰色砂質土(A層)、黄褐色砂質土(B層)の互層をなし、前者は耕作土、後者は整地土・床土であると思われる。

耕作地内の出土遺物は少なく時期の決定は困難であるが、瓦質土釜の細片が出土してい



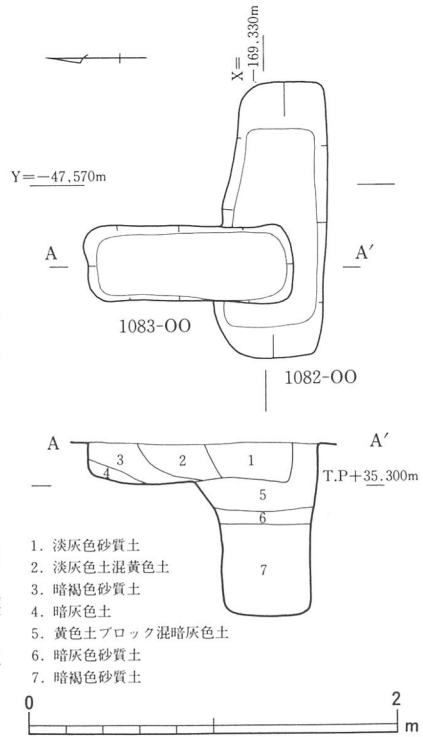
第65図 1097-O S 出土遺物 (1/4)

ることから室町時代と考えられる。堆積状況から考えて、耕作地第3～5面は時期差があまりないと思われる。

1097-O S (第64・65図、図版41)

調査区の西側で、1081-O Zを切るような形で検出された。近～現代の削平によって残りは悪いが幅約3m、深さ約0.2mである。

出土遺物は第65図(162～165)がある。(162)は搏である。表面の摩滅が著しく残りは悪い。(163・164)は瓦である。いずれも摩滅しており残りは悪いが、(163)には布目や離れ砂が見られる。(165)は瓦質の小皿で復元口径8.8cm、復元器高1.9cmを測る。

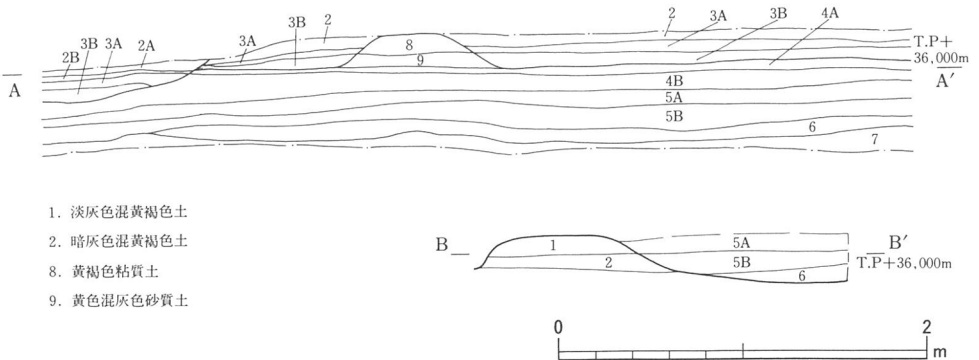


第67図 1082・1083-OO  
平面・断面図(1/40)

1082-O O (第67図、図版22)

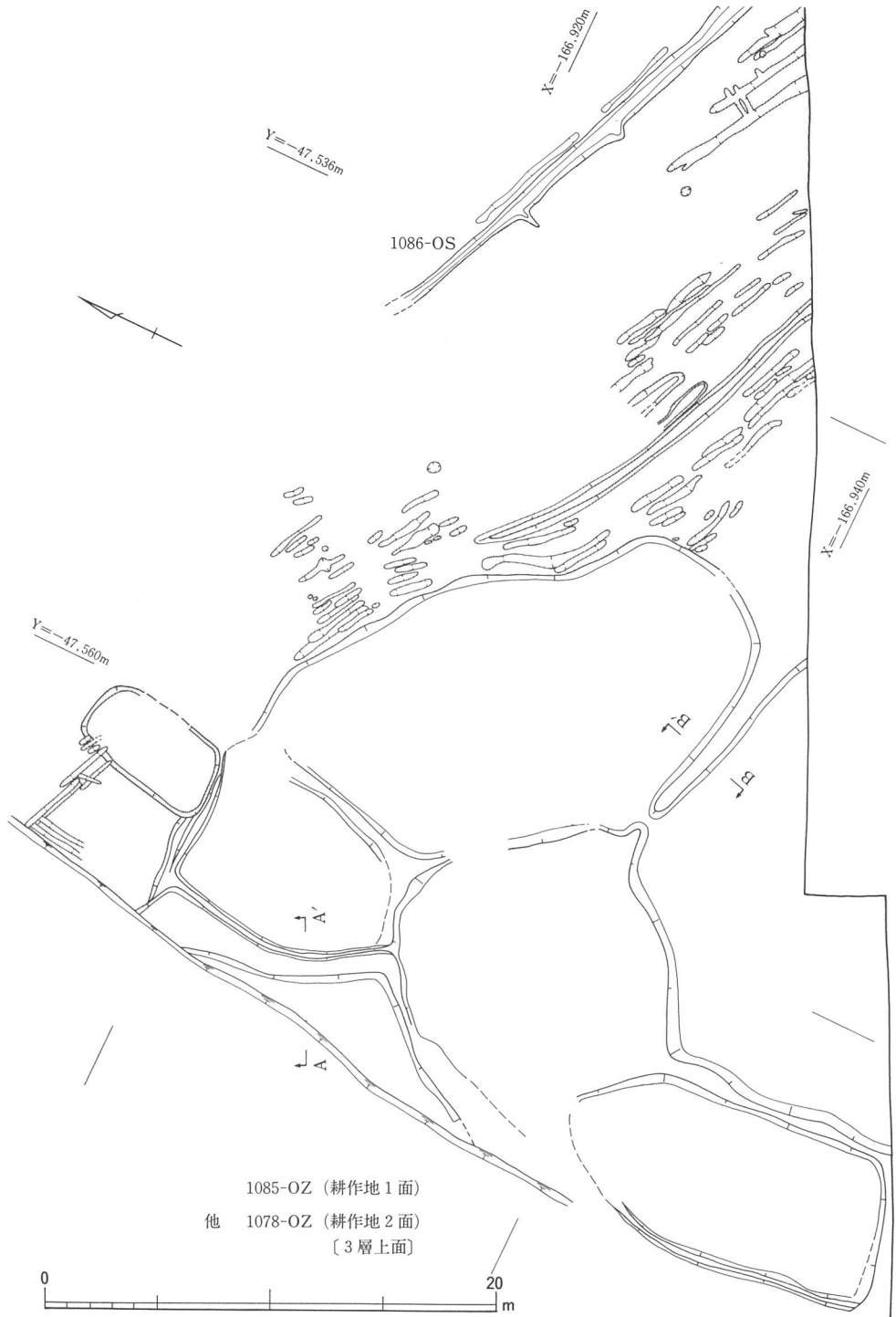
調査区西側の第6層上面で検出した。平面形は長辺1.5m、短辺0.5～0.6mの長方形を呈し、深さ0.95mを測る。埋土は3層に分層でき、遺物は須恵器甕片が出土した。

土坑の時期は検出面が耕作地5面に当たるため室町時代のものと思われる。



- 1. 淡灰色混黄褐色土
- 2. 暗灰色混黄褐色土
- 8. 黄褐色粘質土
- 9. 黄色混灰色砂質土

第66図 耕作地畦畔断面略図(1/40)



第68図 1078・1085-OZ平面略図(約1/300)

1083-〇〇 (第67図、図版22)

調査区西側の丘陵低地部に位置し、1082-〇〇の北西側を切り、第6層上面で検出した。

平面形は長辺1.1m、短辺0.5m前後の長方形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は4層に分層することができる。

遺物は瓦器片3点、常滑焼甕片1点、土師器片1点、須恵器壺類片1点、甕片6点などが出土したが、いずれも細片で図示できなかった。

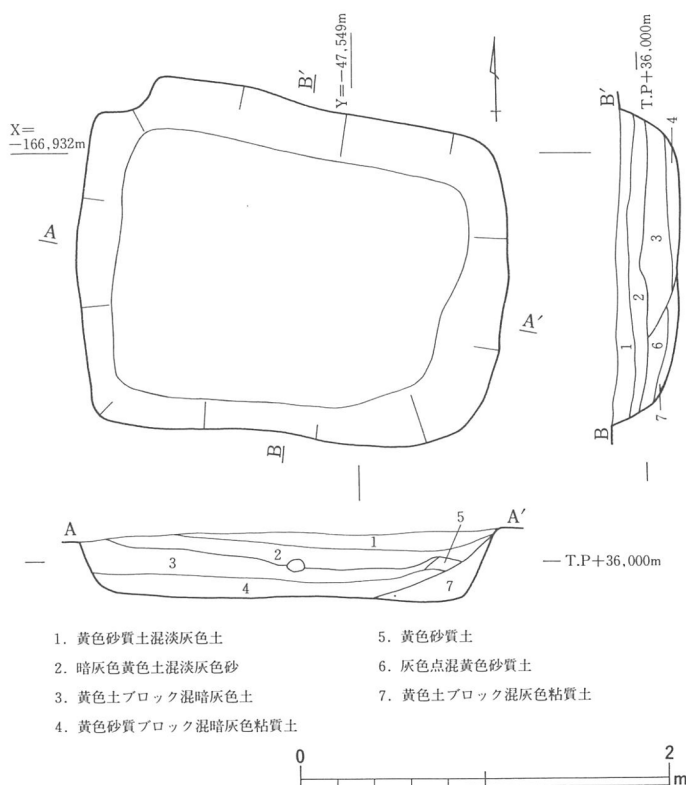
土坑の時期は検出面が6層上面に当たるため、室町時代のものと思われる。

1084-〇〇 (第69図、図版22)

調査区中央部南側の丘陵低地部に位置し、第6層上面で検出した。平面形は長辺2.35m、短辺1.75~1.90mの長方形を呈し、深さ0.35mを測る。埋土は7層に分層することができ、上層部はやや砂を多く含んでいた。

遺物は第1層より瓦器片2点、土師器片2点、須恵器甕片3点、第2層からは瓦器片3点、土師器片1点、第3層からは瓦器片3点、土師器片1点、須恵器片2点、第4層からは土師器片1点、第5層からは須恵器片1点が出土した。第6・7層からは遺物は出土しなかった。

土坑の時期は瓦器や土師器などの遺物や、第6層上面に当たることから室町時代のものと思われる。



第69図 1084-〇〇平面・断面図 (1/40)

#### IV. 江戸時代以降

江戸時代以降の遺構は、調査区の北東丘陵上にて検出されたが、近～現代の削平によって攪乱されている部分が多く明確な形状や規模のわかるものはなかった。

##### 1085-O Z (第66・68図、図版23)

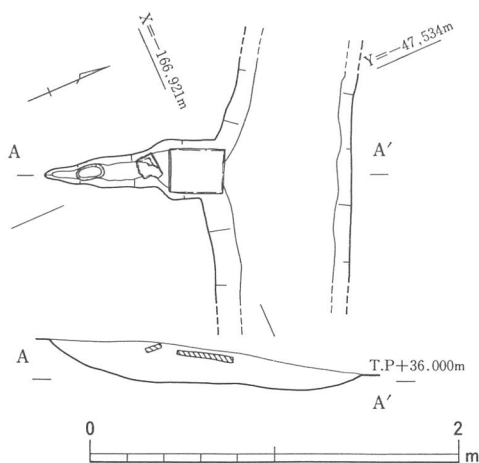
調査区南側の丘陵微高地上の標高T.P約36.2mに位置する。幅約0.8mの畦畔を持ち、幅0.10～0.35mの素掘小溝が約40条検出された。小溝の方向はN-64°-Wである。耕作地第1面上と思われる。耕作地の時期は遺構の北側を区画すると思われる溝(1086-O S)の出土遺物から近世と思われる。

##### 1086-O S (第70・71図、図版23・41)

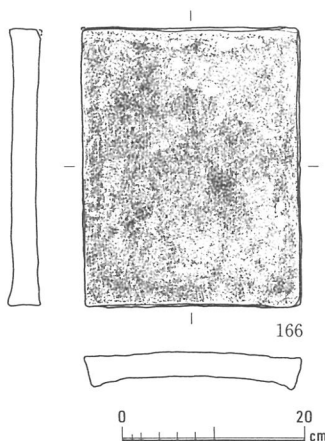
調査区のはぼ中央部に位置し、丘陵部上の南北方向に段地形をなす境を区画するようにして東西方向に検出された。

検出全長は約25m、幅0.6～0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は淡灰色砂質土である。一部に幅0.4m、長さ1.2m前後で、南側が細く北側を開くような形状の水口状の施設が検出された。溝の底ではぼ完形の瓦が出土している。

遺物としては瓦(第71図166)のほか陶磁器片、須恵器甕片17点(5種)、器台片1点が出土している。(166)は平瓦で長さ29.4cm、幅23.7cm、厚さ3.5cmを測る。



第70図 1086-O S 平面・断面図 (1/40)



第71図 1086-O S 出土遺物 (1/8)

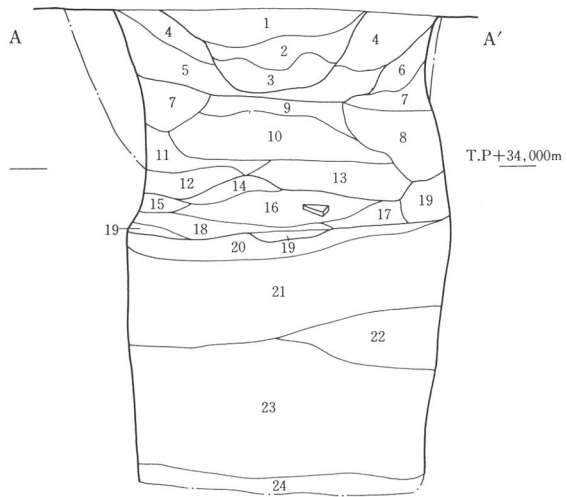
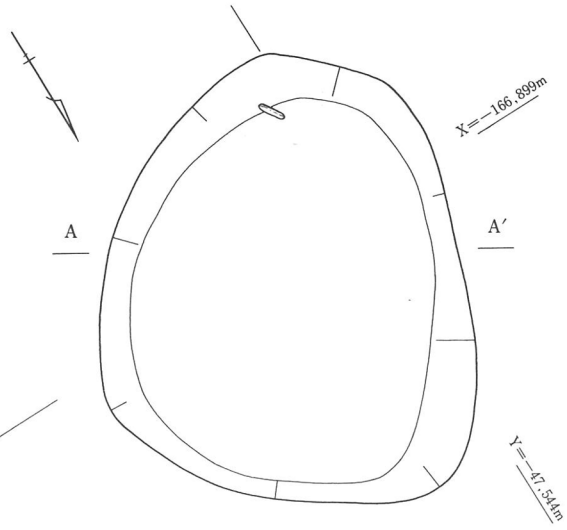


1087-O W (第72図、図版24)

調査区北側の段地形平端部の標高T.P約34.8mに位置する。

平面形は楕円形を呈し長径2.4m、短径2m、深さ2.6m以上である。素掘りで深かったため、底を確認できなかったが、埋土は大きく5層に大別することができた。

遺物は第1層から瓦4点、土師器片2点、染付片1点、第2層から須恵器甕片1点、第3層から瓦1点、第4層から木製品が出土した。第5層からは遺物を確認できなかった。



1088~1090-O S (第23・73図)

調査区の東側で検出された。

1088-O Sは北西～南東にかけて、1089-O Sは1088-O Sから分岐して西北西～東南東にかけて、1090-O Sは1089-O Sから分岐して南北方向に延びる。

いずれも幅0.3~0.5mで、深さ0.45~0.60mを測る。断面形状はU字状及び逆台形状である。

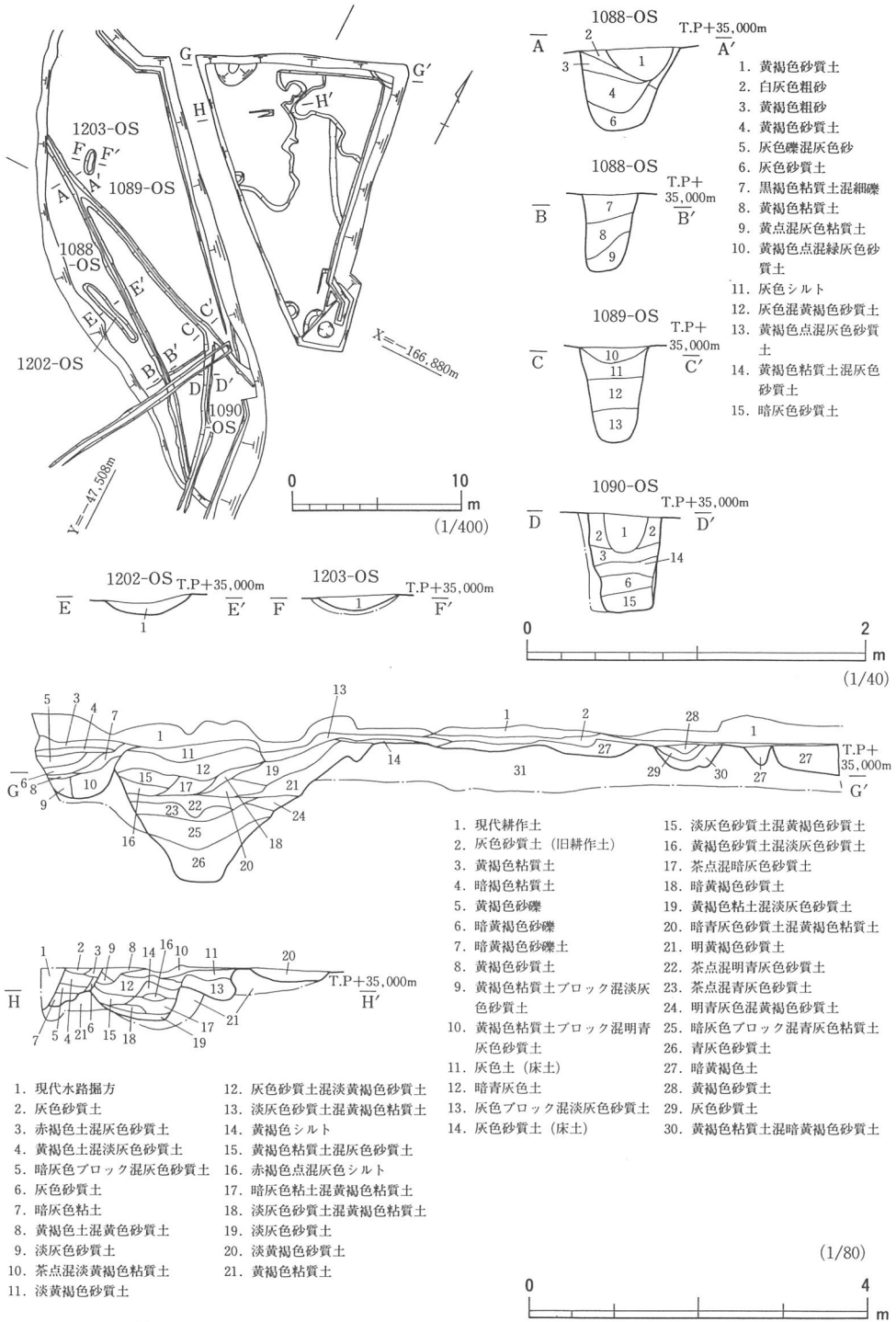
埋土は砂質土系が多く、砂、細礫、粘質土が多く混じる。

遺物は須恵器壺類片、甕片、土師器片などが少量出土したが、いずれも細片であった。

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1. 淡灰色砂質土          | 13. 淡灰色砂            |
| 2. 橙色混緑灰色砂質土       | 14. 黄褐色粘土           |
| 3. 灰色粘土ブロック混暗灰色砂質土 | 15. 淡黄褐色粘土          |
| 4. 橙色土ブロック混緑黄色砂質土  | 16. 暗灰色粘土           |
| 5. 橙色土ブロック混淡緑灰色砂質土 | 17. 黄褐色粘質土          |
| 6. 黄橙色粘質土混黄褐色砂質土   | 18. 黄褐色粘土           |
| 7. 黄橙色粘質土混黄褐色砂質土   | 19. 暗灰色粘土           |
| 8. 青灰色砂質土          | 20. 緑灰色粘土           |
| 9. 茶灰色砂質土          | 21. 明緑灰色粘質土         |
| 10. 暗茶灰色砂質土        | 22. 暗灰色粘土ブロック混青灰色粘土 |
| 11. 淡灰色粘質土         | 23. 暗灰色粘土混青灰色土      |
| 12. 暗灰色粘土混灰色砂質土    | 24. 黒色砂質土           |



第72図 1087-O W平面・断面図 (1/40)



1. 黄褐色砂質土
2. 白灰色粗砂
3. 黄褐色粗砂
4. 黄褐色粘質土
5. 灰色礫混灰色砂
6. 灰色砂質土
7. 黒褐色粘質土混細礫
8. 黄褐色粘質土
9. 黄点混灰色粘質土
10. 黄褐色点混緑灰色砂質土
11. 灰色シルト
12. 灰色混黄褐色砂質土
13. 黄褐色点混灰色砂質土
14. 黄褐色粘質土混灰色砂質土
15. 暗灰色砂質土

1. 現代耕作土
2. 灰色砂質土 (旧耕作土)
3. 黄褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 黄褐色砂礫
6. 暗黄褐色砂礫
7. 暗黄褐色砂礫土
8. 黄褐色砂質土
9. 黄褐色粘質土ブロック混淡灰色砂質土
10. 黄褐色粘質土ブロック混明青灰色砂質土
11. 灰色土 (床土)
12. 暗青灰色土
13. 灰色ブロック混淡灰色砂質土
14. 灰色砂質土 (床土)
15. 淡灰色砂質土混黄褐色砂質土
16. 黄褐色砂質土混淡灰色砂質土
17. 茶点混暗灰色砂質土
18. 暗黄褐色砂質土
19. 黄褐色粘土混淡灰色砂質土
20. 暗青灰色砂質土混黄褐色粘質土
21. 明黄褐色砂質土
22. 茶点混明青灰色砂質土
23. 茶点混青灰色砂質土
24. 明青灰色混黄褐色砂質土
25. 暗灰色ブロック混青灰色粘質土
26. 青灰色砂質土
27. 暗黄褐色土
28. 黄褐色砂質土
29. 灰色砂質土
30. 黄褐色粘質土混暗黄褐色砂質土

第73図 1088~1090・1202・1203-O S平面・断面図 (1/400・1/40)  
谷部北側平面・断面図 (1/400・1/80)

## 第Ⅳ章 ま と め

野々井遺跡の調査は1987年の試掘調査開始から1993年3月まで実施した第6次調査終了まで約7年の歳月がかかり、1993年9月25日には和歌山県までの全線開通が達成された。

当協会が実施した近畿自動車道の調査では多くの成果をあげることができた。主なものは野々井遺跡の東側に隣接する大庭寺遺跡で古墳時代の遺構・遺物が多く検出され、泉北地域での須恵器生産に関わる初期の段階の窯跡が検出されている。また、大庭寺遺跡の北東に位置する伏尾遺跡では、古墳時代の集落とそれに伴う墓である古墳群がセットで検出されている。他にも各時代を通じて様々な遺構や遺物が検出されている。

野々井遺跡の調査は泉北樞丘陵の先端部の丘陵と、その丘陵の全面に広がる開析谷を東西に横断するような形で計画されていた。第1・2・6次調査区は開析谷の西側を流れる和田川の氾濫原に位置し、第3・4・5次の調査区は丘陵上に位置する。

今回の報告は丘陵部分の調査のもので、全調査面積の約半分にあたる。調査地は既に述べてきたように泉北ニュータウンによる道路建設や住宅建設のほか、後世の耕作などに伴う削平及び攪乱を著しく受け、遺構の遺存状況はあまりよくなかった。特に周辺地形の改変は著しいものがあった。調査の結果、古墳時代の溝や土坑、ピット、古墳などが検出され、中世では鎌倉～室町時代の建物跡や溝、土坑、ピットなどを検出することができた。

以下、時期別に今回報告する第3・4・5次調査の成果を記述しまとめとしたい。

**縄文時代.** 丘陵部分では縄文時代の遺構・遺物とも今回の調査では検出することはできなかった。しかし、野々井遺跡の試掘調査では後期初頭の北白川上層式の遺物が出土していることや、第1次調査及び野々井遺跡の北側に位置する西浦橋遺跡、上（カムラ）遺跡、鈴の宮遺跡、小阪遺跡では晩期終末期の長原式土器が出土しており、西浦橋遺跡では土坑墓も併せて検出されていることなどから、近隣に集落の存在が推定されている。今回の調査区の近隣においてもこれらの遺構が検出される可能性がある。

**弥生時代.** 近隣の遺跡を含めても弥生時代前期の遺構は検出されていないが、西浦橋遺跡では遺物が検出されている。中期の遺構・遺物は和田川の氾濫原上に位置する野々井遺跡第1・2・6次調査で多く検出されているが、今回の調査区では遺構を検出することはできなかった。しかし、第4・5次の調査では少量の遺物を検出することができたが、いずれも摩滅が著しく二次堆積によるものと思われる。今回の調査地は近～現代の削平により

遺構の存在は確認されなかったが、南側に広がる丘陵上になんらかの遺構が存在していた可能性は十分に考えられる。

**古墳時代.** 古墳時代の遺構は第4次調査で検出された溝と、第5次調査で検出された古墳、土坑がある。第4次調査で検出された溝（4-O S）は泉北丘陵より延びる丘陵より和田川の氾濫原に下る斜面上に位置する。溝は上部を削平されているため本来の形状や規模は不明であるが、丘陵の縁辺部に沿って流れている。第5次調査で検出された古墳（1001-O G）は径約17mの円墳で、中心の主体部は検出されなかったが西側で墓壇が検出された。墓壇は木棺直葬と考えられ、6世紀後半（田辺編年T K 43型式）の遺物と鉄鏃が内部より出土している。また、川西編年V期の埴輪片が小数であるが出土しており、検出された古墳に伴っていたか、周辺に当該期に属する別の古墳が存在していた可能性もある。

今回の調査区で出土した遺物は古墳時代後期に属するものがほとんどであったが、器台の出土が多く装飾付須恵器の破片も3種類以上出土し、須恵質や滑石製の紡錘車のほか陶棺なども出土している。また、須恵器の生産地である陶邑でも出土量が少ない皮袋形土器の破片と思われるものも出土している。

**鎌倉・室町時代.** 鎌倉時代の遺構は第5次の調査で4棟の掘立柱建物跡や溝、土坑、柵列などを検出することができた。建物跡は桁を東西方向に作られているものと、南北方向に作られるものが見られるが、時期差を持つものではないと思われる。

室町時代は古墳の周溝となった低地部分を鎌倉時代の集落が廃絶した後に耕作地として利用していることが判明した。耕作地の平面的な区画は不明な点が多いが、耕作地造成時の地形改変の変遷を追うことができた。遺物は中国製陶磁器類や瓦器碗が多く出土している。なお、低地部の第1・2・6次調査でも同時期の遺構が検出されている。詳細については現在整理作業中である。

**江戸時代以降.** 谷地形を利用した水路や井戸が検出され、谷部の調査ではため池は近世以降に作られたことが判明した。丘陵上では水路や素掘り小溝群を検出した。

以上のように、今回報告した調査地の多くは削平されていたが、数々の新知見を得ることができた。今後、調査地周辺や泉北丘陵の既往の調査とを合わせた各時代の状況が明らかになってくることを期待したい。

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ののいいせき							
書名	野々井遺跡							
副書名	近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書							
シリーズ番号	第85輯							
編著者名	田中龍男・岡戸哲紀・亀田 学							
編集機関	財団法人 大阪府埋蔵文化財協会							
所在地	〒540 大阪市中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル5F 06-942-3885							
発行年月日	1994年5月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ののい 野々井 その3	おおさか ふうかいし 大阪府堺市 ののい 野々井	27201		34° 29′ 36″	135° 28′ 51″	19920203～ 19920325	2,000	道路(近畿 自動車道) 建設に伴う 調査
その4	同上	27201		34° 29′ 37″	135° 28′ 53″	19920403～ 19920630	3,000	同上
その5	同上	27201		34° 29′ 38″	135° 28′ 55″	19920428～ 19921031	5,590	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野々井	古墳	古墳	古墳 溝 土坑	1基 1条 2基	鉄 鎌 3 須恵器坏身・坏 蓋・提瓶・短頸 壺・紡錘車			
	集落跡	中世 近世	掘立柱建物 土坑 溝 井戸 その他	4棟 35基 15条 1基	土師器・須恵器 瓦・瓦器・染付 碗			

図

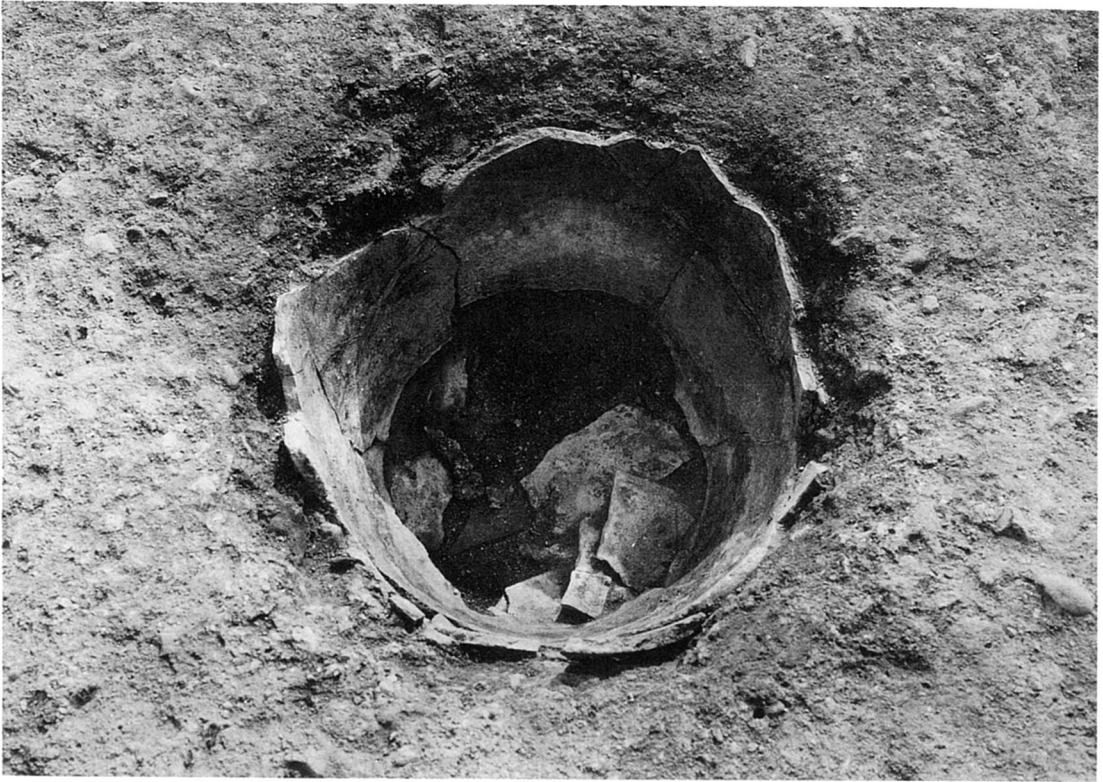
版



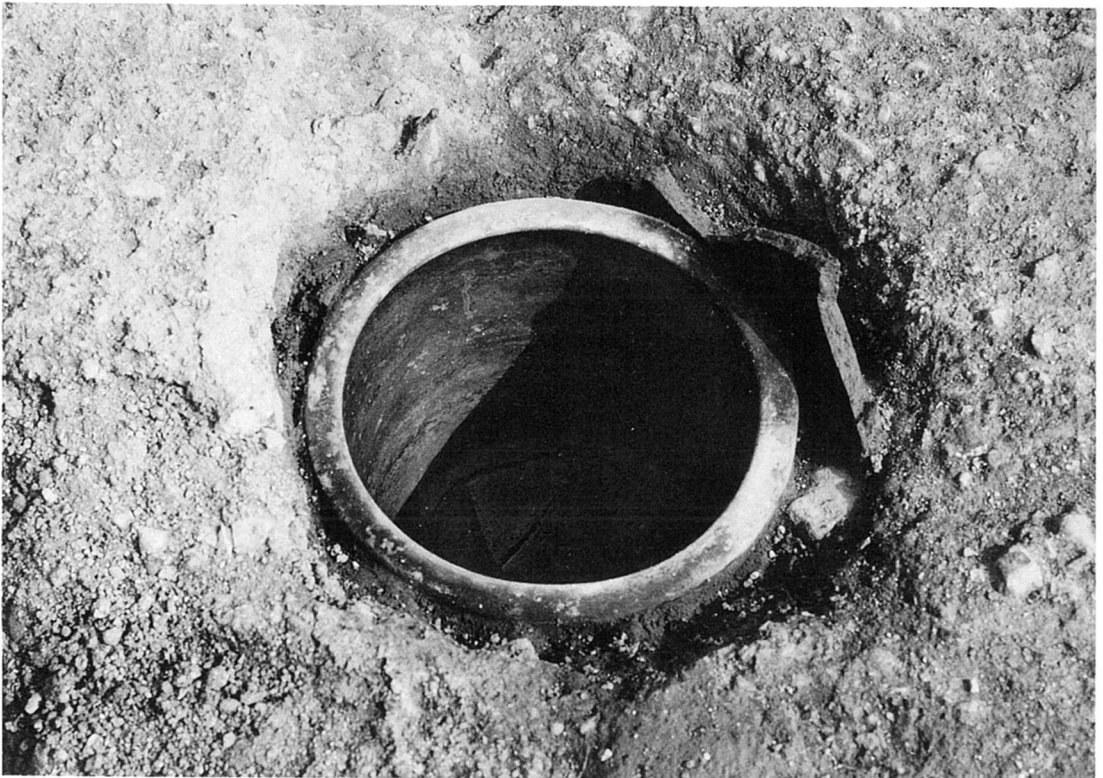
調査区全景（南から）



北側土層断面



13-00 全景 (北から)



33-00 全景 (北から)

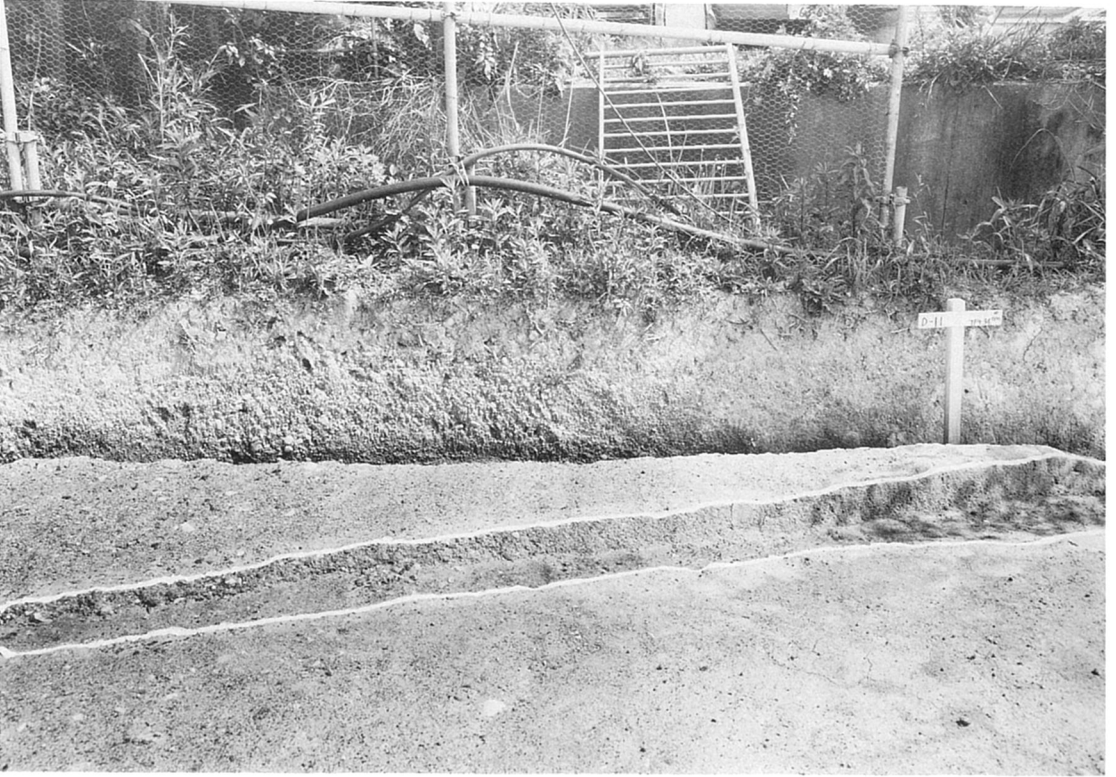




第1調査区航空写真（西から）



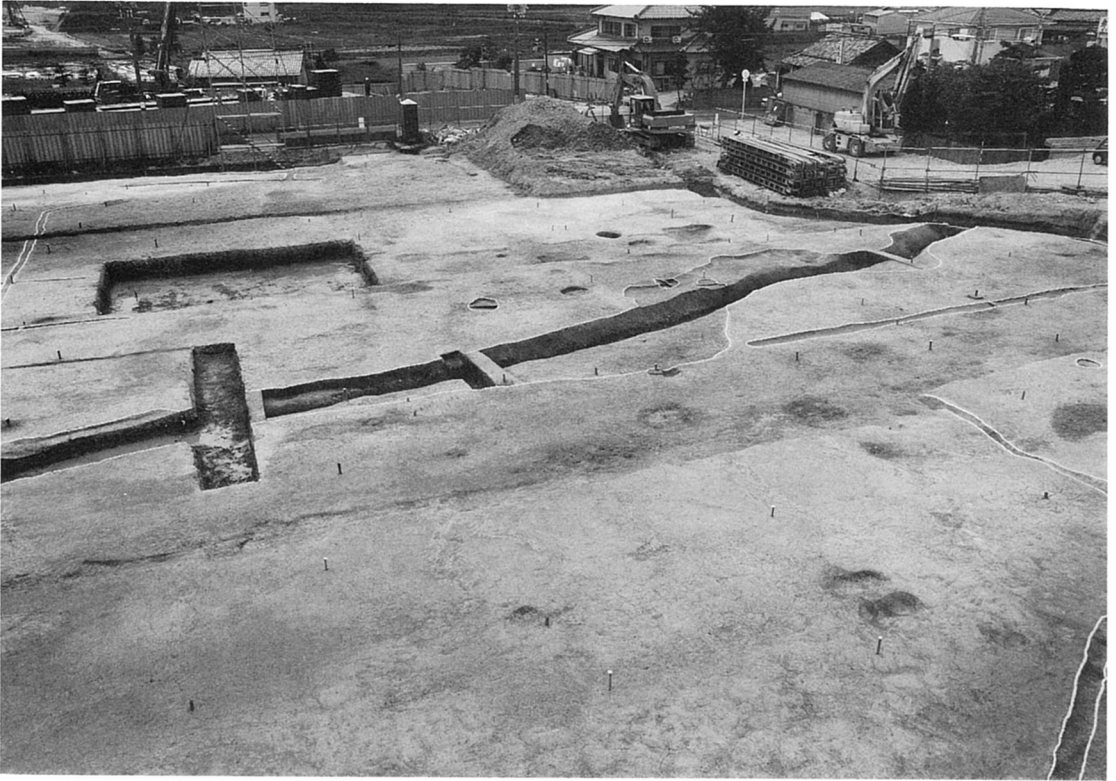
第1調査区全景（東から）



第1調査区南側土層断面



第1調査区西側土層断面



4-O S 全景 (東から)



4-O S 土層断面 (南から)「第16図 4-O S 平面・断面図 C-D間畦」